

# 自己評価・振り返り分科会 実践記録



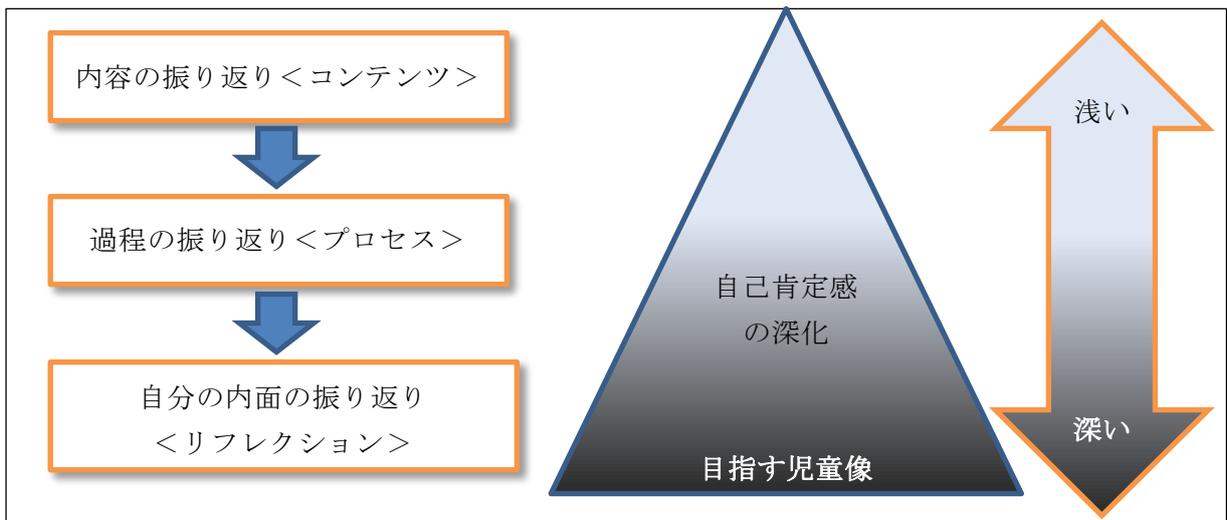
### Ⅲ 自己評価・振り返り分科会

#### 1 分科会の目指す児童像

結果だけでなく，そこに至るまでの過程に着目することで，自分も友達も認めることができる児童

振り返り・自己評価に取り組むことで，過程に着目することや自分の活動に対する達成度を客観的に見る力を付ける。さらに振り返りと自己評価を日常的に行い，次の活動ではどのように取り組むかを考えることができる児童を育てる。教科を絞らず，どの教科でも複数の観点で毎日継続して振り返りを行うことで，劣等感を抱かせることを防ぎ，自分の強みも弱みも受け止めて次の活動へ生かし続ける力が付けば，自己肯定感を高めることができると思う。

#### 2 主題にせまるための手だて



本分科会では，上の図のように，自分の強みを振り返る姿を目指してきた。そのために，5つの手だてを実践してきた。

##### (1) 振り返りの段階を意識する。

学習や活動，日常生活で行う振り返りを，3つの段階で意識付けした。①から③に向かうにつれて振り返りによる自己肯定感は深化すると考えた。

##### ①学習や体験のめあてや目標，内容についての振り返り <コンテンツの振り返り>

めあてや目標に対する振り返りを行うことで，その課題がどの程度達成できたかが分かり，次への課題設定に生かす力を付けることができる。

体育を例として挙げると、「マット運動の前転の仕方を理解することができたか」というめあてに対して、「できた」か「できない」かを振り返る。比較的容易に行うことができる。詳細に、どこができてどこができなかったかを分析することで、次への目標設定を行うことができる。

ただし、「できた⇔できなかった」「分かった⇔分からなかった」「楽しかった⇔つまらなかった」等、2面的な評価に陥りやすいので、教師側からの具体的な問いかけが必要になる。

## ②学習や体験の過程や学び方についての振り返り <プロセスの振り返り>

自分が課題に取り組んだ過程について目を向ける。

算数を例に挙げると、「コンパスを使う活動で、どのようにして課題に取り組みましたか」という発問をして、

「コンパスの使い方が分からなかったけど、最後まで諦めずにがんばった」

「分からないことを、友達に聞いて取り組んだ」

「結局時間内に終わらなかったけど、いろんな方法を自分で考え出すことができた」

「友達と一緒に考えながら学習すると、とても分かりやすかった」

など、どのようにして課題に取り組んだかを振り返る。答えが正答かどうかなど、結果に注目がいきやすいが、そこまで自分がどのように課題に取り組んだのか、自身の学び方や関わり方について考えることで、自分のよさを知るきっかけにする。過程を振り返ることで、失敗や間違いの結果になったとしても、自分の取組を肯定的に捉えることができるようになる。そして、再チャレンジの意欲へとつながっていく。

## ③自分の内面についての振り返り <リフレクション>

振り返りの中で、自分の内面についての理解を深めることを意識する。

国語を例として挙げると、書く活動のまとめの振り返りで、「この単元の学習を通して、自分について何か気が付いたことはありますか」という問いを投げかけて、

「作文を書くことは苦手だけど、発表では自分の考えを伝えることができた。やっぱり書くことより話すことの方が得意だ」

「自分の考えを素早く書くことができた。次はもっと相手が分かりやすいように、内容を考えていくことも自分にはできると思う」

「相手に質問することができるのが強みだ。次の活動では、自分の考えが伝わりやすいように短い言葉で考えてみようと思う」

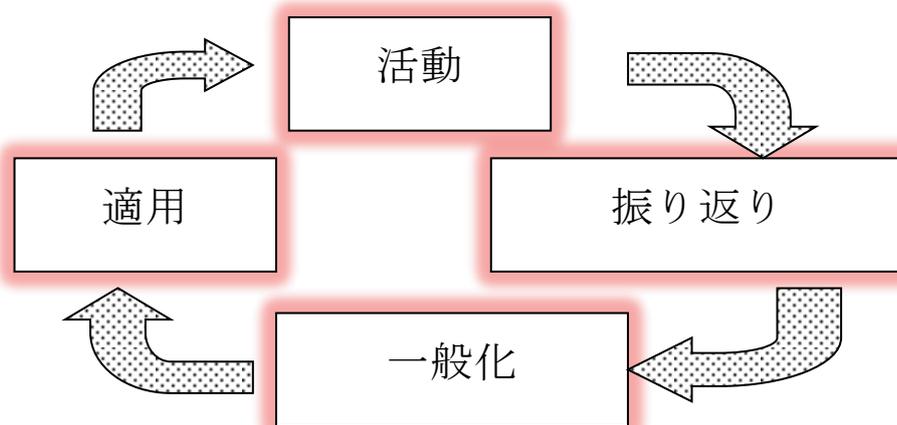
「友達に、『よくそんな表現考えつくねえ』と言われた。自分ではそんなことないと思っていたけど、そんな部分が自分にはあるんだなあ」

「けっこうミスしてもへこたれない自分に気付いた」

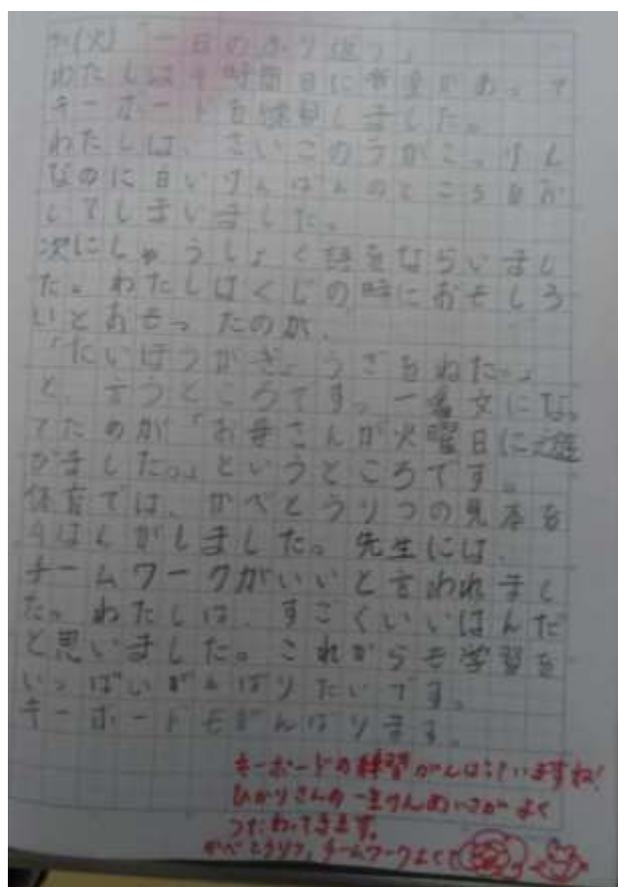
「友達と学ぶことで、自分の力が引き出される気がする」

など、各々の児童が自分のもつ特性について気付いていけるように問いを投げかけてみる。友達や教師からのフィードバックもとても重要になる。このように、児童自身が自分の内面に気付いて、自分の存在を尊重し、肯定的に捉えられるようになっていくことを最終的な姿として目指していく。

(2) 振り返りジャーナルに取り組む。



毎日、日常生活のある場面をテーマとし、そのテーマに沿って自分自身の活動や行動を振り返り、ノートに書く活動である。この活動を扱う上で、「自分に向き合う」「多様な振り返りを行う」「習慣化する」の3つの要素が必要になる。これらの要素を含んだ振り返りを日々行うことが重要であり、数多くの量をこなすことで、はじめて質が向上する。振り返りジャーナルは「自分に向き合う」「多様な振り返りを行う」「習慣化する」という要素を含めることができる手だてであり、メタ認知を高めることができる。メタ認知とは、自己の認知現象についての知識やこれをモニターすること、それに基づき行動を調整することなどを指す。振り返りジャーナルの目標は、自身の反省日記ではなく、自分の内面の振り返りを目指すことである。



教師は、書かれたことに対して過剰な判断は避け、肯定的態度で接するようにする。教師と児童との心の架け橋という役目もあるので、信頼関係を育むツールとして大切に扱っていく。  
※上図の振り返り～適用までが本研究で言うところの広義の「振り返り」である。

(3) 目標を意識する。

振り返りと称して、ただ漫然と感想を書かせるだけでは次の活動や学習に変容を求めることはできない。何のために振り返っているのかということを常に意識していかなければならない。例えば、行事等において学級目標に振り返って活動のめあてを考える。また、個人でその行事にどう取り組むか目標設定をした上で活動後に目標に沿って振り返りを行う。このような振り返りを繰り返すことで、常に一貫した目標に向かって活動することができる。活動⇒振り返り⇒目標設定⇒活動と、学習サイクルを意識して取り組むことが大切になる。

(4) 自主学習に生かす。自主学習でも振り返る。

家庭学習の一環として、自主学習に取り組む。学校での振り返りが生かされる場である。授業での振り返りによって導き出された自分の課題を、自主学習で解決していくことができる。さらに、毎日の自主学習の後に、よかった点と改善点の2点において振り返ることで、学習の質を高めていく。これが学校の授業へと結び付いていく。学校と家庭でそれぞれの振り返りを通して学習がリンクしていく。

また、定期的に友達同士でコメントをし合うことで意欲を高めることができる。そして、最大の目的は、保護者に自身の学習に関してフィードバックをもらえることである。友達や親が、自分の学びに対してサポートしてくれる存在であることは、児童の自尊感情を高めていく。

(5) 相互評価・フィードバックを有効に使う。

自己評価だけで振り返りを行っていると、自分に対する固定概念が付いてしまい、新たな発見がなくなってしまう。メタで自分を見つめることと、第三者の目から見えることには差異がある場合がある。自分の新しい一面に気付くことに、相互評価やフィードバックは効果がある。例えば、学習や活動後にペアや小グループで振り返ったり、一日の中での友達のよかったところを帰りの会で発表したりするなど、相手を認め合う場を作っていくことを心掛けていく。話し言葉だけでなく、付箋や手紙などに文章を書いて伝えるなど、振り返りと同様に多様な形を考えていく。



### 3 学習指導案

#### 第1学年 生活科学習指導案

(1) 単元名「つくろう あそぼう」

(2) 単元の目標

身近な自然物や、身の回りにあるものを使って、おもちゃを工夫してつくったり、遊び方を工夫したりして、遊びの面白さや自然の不思議さに気付き、安全に気を付けて、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。

(3) 単元の評価規準

生活への 関心・意欲・態度	活動や体験についての思考・判断	身近な環境や自分についての 気付き
身近な自然物を使って、遊びに使うものをつくったり、遊んだりすることに関心を持ち、みんなで楽しく遊ぼうとしている。	自然物や身の回りにあるものを利用して、遊びに使うものを工夫してつくったり、みんなが楽しく遊べるように、約束やルールを考えたりしながら、みんなで楽しく遊んでいる。	自然物を利用して遊んだり、遊びに使うものをつくったりすることの面白さや、自然の不思議さ、秋の自然物を使ってみんなで遊ぶことの楽しさに気付いている。

(4) 指導について

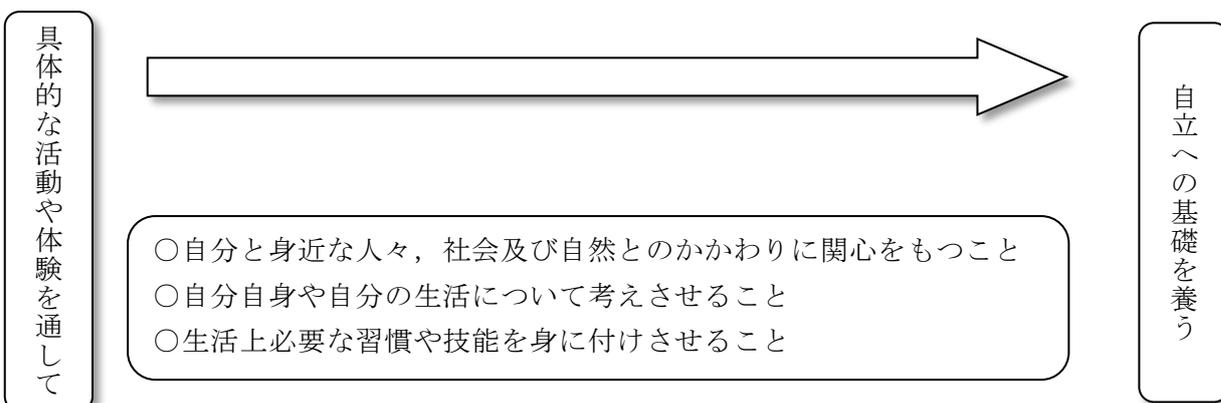
①単元について

学習指導要領には、以下のように示されている。

身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫して作り、その面白さや自然の不思議さに気付き、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。

生活科の階層としては、第2の階層「自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容」に位置付けられている。本単元では、秋の自然物や身近な材料をもとにおもちゃをつくる活動である。

さらに、生活科の教科目標は学習指導要領によると、次の5つの要素によって構成されている。



上記の5つの要素を本単元の活動において、具体的な言葉にすると以下のようになる。

(ア) 具体的な活動や体験

- ・おもちゃづくり・遊び

(イ) 自分と身近な人々，社会及び自然とのかかわりに関心をもつこと

- ・葉や木の実等の秋の自然物

(ウ) 自分自身や自分の生活について考えさせること

- ・おもちゃを改良しより楽しくしていく活動を通して，自分のよさや可能性に気付く。

(エ) 生活上必要な習慣や技能を身に付けさせること

- ・安全への意識を高める。
- ・道具や用具の準備，片付け，整理整頓ができる。
- ・時間を守る。

(オ) 自立への基礎を養う

- ・秋の自然との関わりに関心をもちおもちゃを作り，遊ぶ活動を進んで行う。
- ・自分自身について理解を深める。
- ・生活上必要な技能を高める。

上記の5つの要素と本分科会のテーマである「振り返り・自己評価」を照らし合わせると，(ウ)の項目が重点項目になり，本単元では「おもちゃを改良し，より楽しくしていく活動を通して，自分のよさや可能性に気付く」を重点目標として指導をする。

## ②児童について

前単元である「たのしいあきいっぱい」では，校庭にある秋の自然物を集めたり，その自然物で遊ぶ活動を行ったりした。本学級では1学期から継続してめあてに対する振り返りに取り組み続けてきた。前単元では，1単位時間ごとの振り返りも3つの観点で行った。ほとんどの児童が秋の自然物を探し，楽しく遊ぶことができている。振り返りの評価は「◎・○・△」としていて，「秋の自然で楽しく遊ぶ」の項目に△を付けた児童は27人中2人であり，1名は活動が進むにつれて△が○になり，もう1名は活動をよりよくできなかったという理由で○から△という自己評価を行っている。考えた遊びを友達と工夫したり，さらに新しい遊びを考えたりすることができる児童もいて，自己評価でもその点に気付き，文で記すことができている。

## ③教材について

本単元では，秋の自然物や身近な材料をもとにおもちゃをつくる活動を行う。用意する秋の自然物はどんぐり，落ち葉，松ぼっくり，木の枝であり，身近な材料は紙箱や紙コップ，プラスチックケースや竹串等である。前単元の「たのしいあきいっぱい」とつながりのある単元であり，児童自身が集めた秋の自然物を使っておもちゃをつくる活動である。本単元の重点を置く指導事項を「おもちゃを改良し，より楽しくしていく活動を通して，自分のよさや可能性に気付く」としているので，おもちゃを改良するための思考する場面と改良するための豊富な材料がある環境を設定する。

(5) 目指す児童像に迫るための研究主題との関係

振り返り分科会では、目指す児童像を結果だけでなく、そこに至るまでの過程に着目することで、自分も友達も認めることができる児童と設定した。

本分科会では生活科の学習に、自己肯定感を育むために、「1単位時間ごとのめあてに対する振り返り」と「振り返りジャーナル」の2つの手法で目指す児童像に迫る。振り返り・自己評価に取り組むことで、過程に着目することや自分の活動に対する達成度を客観的に見る力を付ける。さらに振り返りと自己評価を日常的に行い、次の活動ではどのように取り組むかを考えることができる児童を育てる。教科を絞らず、どの教科でも複数の観点で毎日継続して振り返りを行うことで、劣等感を抱かせることを防ぎ、自分の強みも弱みも受け止めて次の活動へ生かし続ける力が付けば、自己肯定感を高めると考える。

① 1単位時間ごとのめあてに対する振り返り

めあてに対する振り返りを行うことで、その学習がどの程度達成できたかが分かり、次に生かす力を付ける。また、教科を絞らず、複数の観点で行うことで自分の強みや弱みを受け止め、次の活動や日常生活に生かすことができる力を付ける。

本単元の「つくろう あそぼう」では、「おもちゃを改良し、より楽しくしていく活動を通して、自分のよさや可能性に気付く」が重点を置く指導事項なので、気付いたあそびを伝え合う場を設定し、遊びの工夫を児童相互で伝え合うようにする。そして、まとめの振り返りでは記述の時間を5分設定する。今まで児童が取り組んで付けてきた自己評価の力を生かし、自分のよさや可能性に気付くような振り返りを文で記せるようにする。

② 振り返りジャーナル

毎日、日常生活のある場面をテーマとし、そのテーマに沿って自分自身の活動や行動を振り返り、文章に書く活動である。本学級では1学期から毎日振り返りジャーナルに取り組んでいる。生活を振り返り文章に書く力を付けてきた。本単元で振り返りジャーナルは使用しないが、授業のまとめで実施する振り返りの項目に文章を書く欄を設け、自己評価の理由を記入する時間を設定する。

(6) 単元の指導計画と評価規準 (10時間扱い)

	時	学習活動	評価
おもちゃをつくろう	5	①校庭や公園で集めた葉や木の実、身の回りから集めた材料だけを使って遊ぶ。 ②③おもちゃや楽器を工夫してつくりながら遊ぶ。 ④⑤自分がつくったおもちゃや楽器を改良したり、つくるおもちゃを変えたりしながら遊ぶ。	【関・意・態】 自分たちで集めた葉や木の実に関心を持ち、それらの特徴を生かしおもちゃや楽器をつくろうとしている。 【思考・表現】 集めた自然物の中から、使ってみたい物を選び、試したり、見立てたりして、工夫しながらおもちゃや楽器をつくらせている。

みんなで あそぼう	3	①(本時)②つくったおもちゃ で友達と <u>いっしょに遊びな がら、もっと楽しく遊べる ように、つくり方や遊び方 を工夫する。</u> ③おもちゃを改良したり、遊 び方を工夫したりして、み んなで遊びを楽しむととも に、活動を通して気付いた ことを振り返り伝えあう。	【思考・表現】 実際に遊ぶ中で、みんなが楽しく遊 べるように考え、遊びのルールや約束 を工夫している。 【気付き】 遊びのルールや約束を工夫すると楽 しく遊べることや、友達のおもちゃや 楽器には、自分のものとは違うよさ があることに気付いている。
いっしょに あそぼう	2	①自分がつくったおもちゃで 2年生に楽しく遊んでもら うためには、おもちゃや遊 び方を、どう工夫したらよ いかを話し合い、おもちゃ を改良したり遊びのルール を変えたりする。 ②2年生といっしょに、おも ちゃで楽しく遊び、気付い たことを話し合う。	【思考・表現】 おもちゃや遊び方を工夫して、いっ しょに遊んでいる。 【気付き】 自分たちが2年生を楽しませること ができたと分かり、自分自身の成長に 気付いている。

(7) 本時の指導 (全 10 時間中の第 6 時間目)

①本時の目標

集めた自然物の中から、使ってみたい物を選び、試したり、見立てたりして、工夫しながらおもちゃや楽器をつくっている。

②展開

時 間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	【評価規準・評価方法】 ★研究との関連
5	・既習事項と本時のねらいを 確認する。 ・学習の流れをつかむ。 ・場を準備する。	・目標と学習の流れを掲示 する。 「ともだちといっしょに あそぼう」 「おもちゃをしんかさせ よう」 「たのしくあそべるルー ルをかんがえよう」	
3 5	・秋の自然物を使ったおもち ゃをつくる。 【どんぐりごま】 【まつぼっくりのけんだま】	・児童の気付いた工夫につ いて板書していくこと を確認し、工夫する手だ てとして活動に生かせ	

	<p>【どんぐりめいろ】 【どんぐりロケット】 【やじろべえ】 【さかなつり】 【たいこ】 【どんぐりまらかす】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・おもちゃづくりの工夫について発表する。</li> <li>・秋の自然物を使ったおもちゃをつくる。</li> <li>・道具やおもちゃを片付ける。</li> </ul>	<p>るようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の工夫した活動について言葉をかけ、価値付ける。</li> <li>・活動の中盤でめあてに対する気付きを発表させる。</li> <li>・板書や発表の気付きを基に、さらに工夫を考えさせて活動させる。</li> </ul>	<p>【思考・表現】(観察・発表)</p> <p>実際に遊ぶ中で、みんなが楽しく遊べるように考え、遊びのルールや約束を工夫している。</p>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の内容について振り返る。</li> <li>・次時の学習について見通しをもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己評価の「◎・○・△」の理由について記入が難しい児童に言葉をかけて、支援する。</li> </ul>	<p>★【思考】(振り返りカード記入・発表)</p> <p>実際に遊ぶ中で、みんなが楽しく遊べるように考え、遊びのルールや約束を工夫している。</p>

(8) 授業の様子



展開の途中の振り返りでは、児童が相互につくったおもちゃの工夫を伝え合う時間を設定した。おもちゃ作りに真剣に取り組んでいた児童も、この場面では伝え合い、自分のつくったおもちゃの工夫を生き生きと説明していた。



まとめの振り返りでは、本単元の3つのめあてについて「◎・○・△」で自己評価をした。めあてに対して真剣に振り返る様子が見られ、自己評価の理由も文で説明することができる児童もいた。めあてに対する振り返りは1学期当初から継続して行っているため、児童も自分の学習進度を確認したり、次へ生かすために取り組んだりするものであるということをよく理解し、取り組んでいる。

#### (9) 考察（成果と課題）

##### ①成果

1単位時間ごとの振り返りは、各教科で継続して取り組んできたので、児童も意味をよく理解し、取り組むことができた。また、児童は自己評価の三段階の評価にも慣れ、各観点で自分の活動に向き合った真剣な自己評価をすることができた。また、めあてに対する自己評価なので、本時に目指す目標を理解し活動することができていた。

##### ②課題

複数の観点で振り返りを行うことが劣等意識をもたせないための手法ではあるが、重点を置くめあてが明確でないと指導のねらいに沿った活動にならない。本単元では「つくってあそぼう」の「あそぶ」という活動がメインの学習活動であったが、作る活動に没頭する児童が多く、友達と一緒に遊んだり、ルールを考えて伝え合ったりする児童が少なかった。遊ぶという活動をメインにするために、「つくる」場を制限することと、遊びやルールによって作品をつくりかえる必要があるため、「つくる」場は残すということが改善策として挙げられる。

## 4 研究の成果と今後の課題

### (1) 成果

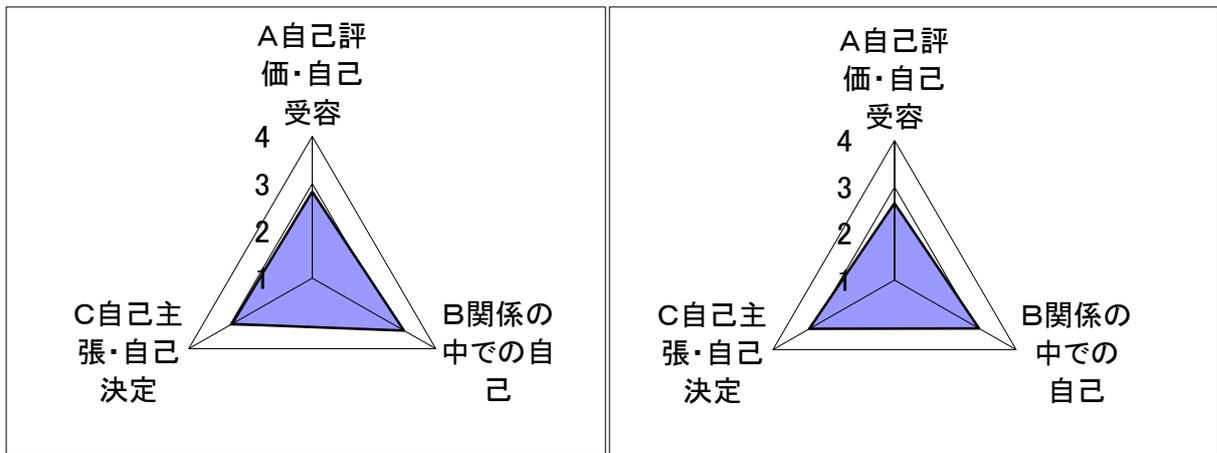
子供たちが見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる手だてとして、振り返り・自己評価に取り組むことは有効であったと考える。児童の主体的な学びの過程を実現するための工夫、思考を広げ深めるための手だてやツールとして活用できたと考える。そして、児童がありのままの自己を確認する「メタ認知」を向上させることで、自分の全てを受け入れ、そこから児童自身が今の自分と対話して、自分のよさを認めていこうという意識が生まれた。このことは自己肯定感につながっていく。今後は、子供自身が自ら様々な場面で振り返りをすることで学習活動を自ら振り返り意味付けたり、獲得された知識・技能や

資質・能力を自覚したり，共有したりすると考える。

以下に研究成果を5年2組のデータとインタビューで考察する。

○振り返りの手立てを継続することで，自己主張・自己決定が少し高くなった。

1 学期始 クラス全体		2 学期終 クラス全体	
A 自己評価・自己受容	2. 8 3	A 自己評価・自己受容	2. 6 5
B 関係の中での自己	3. 2 3	B 関係の中での自己	3. 0 9
C 自己主張・自己決定	2. 9 5	C 自己主張・自己決定	3. 1 0



○児童へのインタビュー「なぜCの項目が高くなったと思いますか？」

- ・提出物を忘れずに出せるようになったから
- ・自分のことが少しだけ見えるようになった気がする
- ・自主学习で勉強していることが自信になってきている気がする
- ・クラスメイトと仲良くなったから自分のことを主張できるようになった
- ・うまくなりたい，できるようになりたいことができたから
- ・よくわからないけれど，友達がいってくれること，注意してくれることが影響している気がする
- ・4年生の時より友達と話すようになったと思う

○初めは，何を書けばよいか分からないと戸惑っていた。今は書くのが楽しかったり，一日の記録として肯定的に捉えたりすることができる児童が多い。

○一日を振り返る中で，自分のよさに気付くことができた児童がいた。

(子供たちの感想より)

- ・今回はこうだったが，次からはこうしようなど，ちょっとずつ自分を直せてきているのでよかった。
- ・今日はこんなことがあったけど，次はこうしようと思えるようになってきた。続けていくいろいろ上達するなと思った。
- ・たまにすごくよいことを書いていると自分で思うこともあります。

- ・次はこうするなどのことが、書いて役立ちました。
- ・最初は書くのに手間取りましたが、だんだん書くのが楽しくなってきました。
- 一日の振り返りを行うことにより、自分の行動や友達の行動を第三者的に見ることができ、改めて自分自身を見つめることができた。
- 児童が落ち着かなくなったとき、過去の振り返りカードを見ることで、自分の頑張ってきたことを思い出し、次の日からもち直すことができた。自分の書いた振り返りから、当時の気持ちを思い出すことができたと考えられる。

## (2) 課題

振り返りを行う際に反省文や学習や体験のめあてや目標、内容についての振り返りにとどまってしまうと主体的な学びの実現や思考を広げ深める振り返りには至らない。本分科会で目指した深い自己肯定感を育成するためには、振り返りを指導する際に児童の見取りと学習や諸活動の指導目標を把握した上での教師の高い技量が必要なことが課題である。

具体的には以下の3点を課題として挙げる。

- 自分の内面への振り返りにせまるために、教師の発問や質問、問いを洗練化していくことが課題である。ただ振り返りジャーナルを書かせても、学習や体験のめあてや目標、内容についての振り返りに留まってしまう。児童がどのような発問をすると、自己の内面への振り返りができるかを考えなければならない。
- 児童の振り返りを促す問いは、学習中や活動中の児童の様子をどのように見取るかによって大きく左右される。複数の視点をもつことは非常に困難であるが、一人一人の児童や、集団の行動や感情を細かに見取っていくことが必要になる。
- 児童の実態や学習・活動の状況に応じて、以下のような多様な振り返りを用意しておかなければならない。

言語化の方法…「書く」「話す」「話し合う」等

非言語化の方法…「絵」「粘土」「モール」「写真」等

グループサイズ…「ソロ」「ペア」「トリオ」「グループ」「全体」等

さらには、児童の実態だけでなく、学年の実態や指導目標なども考慮した上で、様々に選択できる環境と技術を整えていく必要がある。

## 5 資料

### (1) 生活科振り返りカード

せいかつか：つくろう あそぼう ふりかえりカード

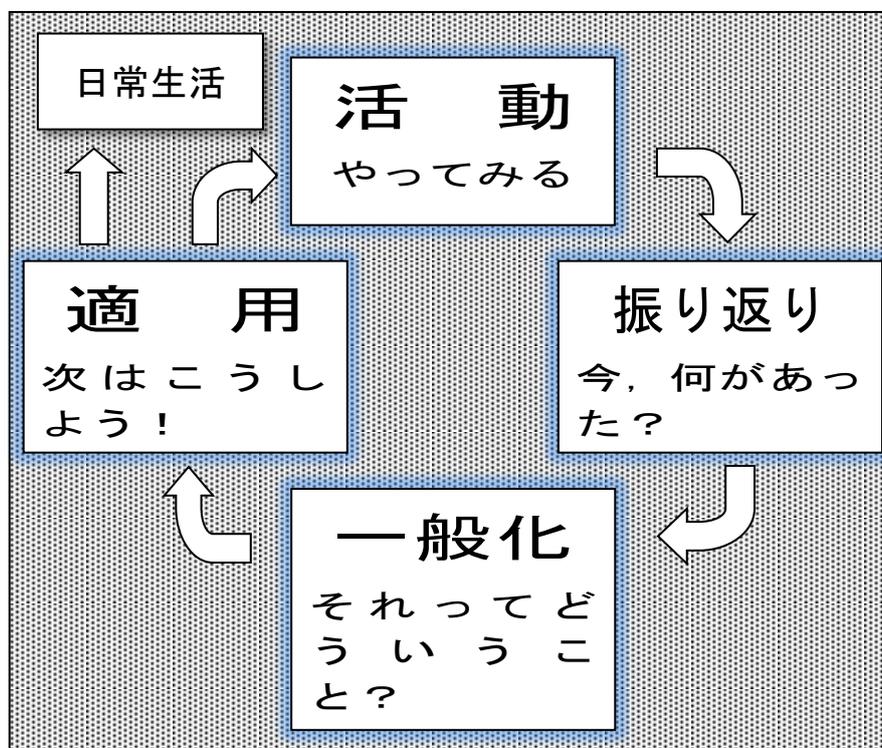
一ねん二くみ なまえ

(がくしゅうのながれ)

- ①ともだちといっしょに、もっとたのしくあそべるようにおもちゃやあそびをくふうする。
- ②ともだちといっしょに、もっとたのしくあそべるようにおもちゃやあそびをくふうする。
- ③みんなであそびをたのしみ、くふうしたことをつたえあう。

ひにち	めあて	◎・○・△	かんがえ
① /	ともだちといっしょに あそぼう		
	おもちゃをしんか させよう		
	たのしくあそべるルール をかんがえよう		
② /	ともだちといっしょに あそぼう		
	おもちゃをしんか させよう		
	たのしくあそべるルール をかんがえよう		
③ /	おもちゃをしんか させよう		
	たのしくあそべるルール をかんがえよう		
	ともだちにきづいたこと をつたえよう		

## 振り返りジャーナルは何のため？



### 振りかえりジャーナルのつけ方

- 1 まず、何があったかしっかり振り返ること。まじめに、自分が何をしたか、グループがどうなっていたかを思い出すこと。(振り返り)
- 2 そこで自分がやったこと、グループで起こっていたことについて、それはどういうことなのか、そのことからどういうことがいえるのか説明できること。(一般化)
- 3 一般化で見つけたことを、次にどう生かすか考え、実行するために必要なことを決めること。次にやるときにはどうやるか決めること。目標を決めること。(適用)

日々、わたしたちは成長しています。飯を食って、体を動かし、ぐっすり寝てれば普通に成長しますが、それではそこらへんの動物や植物と変わりません。人間として成長するためには、生きることの意味を見つけなくてははいけません。目標をもち、チャレンジし、その結果を振り返り、そこから自分がよりよく生きるために必要なモノを見つけ出し、それをためすためにまた目標を決め、チャレンジをくり返す。そうやって人は成長していきます。と、なんだかむずかしいことを言っているようですが、実はこれ、みんな無意識（あんまり深く考えないで）のうちにやっていることなんです。

この振り返りジャーナルで、これをはっきりと意識してやることによって、みんなの成長に少しでも力になれると思うのです。

まずは気楽に、思ったことを書いていってみてください。

# 地域・保護者との連携分科会 実践記録



## IV 地域・保護者との連携分科会

### 1 分科会のめざす児童像

地域・家庭・学校が連携して、様々な課題に意欲的に取り組める力のある児童

児童の生活基盤を考えた場合、児童が学校で過ごす時間よりも地域や家庭で過ごす時間の方がはるかに長い。学校で自己肯定感を育てても地域や家庭でその育成が継続されなければ児童に自己肯定感を定着させることは難しい。また、その逆も考えられる。そこで、本分科会では地域や保護者を交えながらどのように児童の自己肯定感を育成すればいいのかという大きな枠の中での手だてを検討する。しかし、学校が、家庭教育に分け入って行って児童の自己肯定感の育成を行ったり、保護者への啓発活動を行ったりすることは困難が予想される。そこで今年度は、児童のより深い自己肯定感を築くためには欠かさない場として地域や家庭が、学校という場、特に授業においてどんなことが可能なのか探ることとした。

### 2 主題にせまるための手だて

本分科会では、目指す児童像にせまるために、地域や家庭（保護者）がどのような考えで参加したり、どのような形態で授業に入ったりすることが児童の課題への意欲につながるかについて考えた。教科によっても参加の仕方は多種多様に考えられるが、地域や家庭（保護者）参加への考え方は下記の通りである。

「教える」というより、共に考え、児童の頑張りや素晴らしい点をほめたり励ましたりする。児童の気持ちに寄り添い、学習としてはできていなくても、共感し、どうしたらできるようになるか、共に考え見守るという役割。

保護者や地域に協力を求めるにあたり、学校・地域・保護者のよさを生かしながら、『共に育てる』という趣旨と研究の視点を丁寧に伝えた。このことで、協力してくれる地域の方や保護者の方に共通理解を図り、児童を見守る大切な存在となることを共に目指すための仕組みづくりに取り組んだ。

#### 具体的な取組…… 1 地域の人材を活用した自己肯定感の育成

栄小学校は従来から地域との結びつきが強く、協力してくれる地域団体が多い。例えば、わくわく栄、育成会さかえ、栄小地域安全連絡会、防犯協会、保谷苑などある。この地域団体に着目して授業内容や学年を考慮し取組を具体化していった。

##### (1) 取り組み手順

授業や保健指導に地域の方が参加できる場や機会の設定をし、地域の方へ授業への参加の依頼をした。その際一定の期間内でご都合の良い日の希望を取り時間割の調整をした。(資料4, 5, 6) 依頼の窓口は管理職1か所とし、地域の代表者と連絡を取った。授業当日より前に、授業の内容や趣旨について記載したプリントをお渡した。(資料7)

授業当日は、5分ほど前に来ていただき、あらためてご挨拶と授業の概要について確認をした。

授業終了後、児童のアンケートを取った。(資料8)地域の方には、授業終了後、あらかじめお渡ししておいたアンケートに記入していただき、後日提出してもらった。(資料9)

(2) 具体的な授業実践例 (資料参照)

- ・ 4年生算数少数指導
- ・ 4年生総合的な学習の時間
- ・ 4年生理科
- ・ 4年生図画工作
- ・ 4年生国語
- ・ 5年生家庭科
- ・ 5年生図画工作
- ・ 5年生道徳



(4年 総合的な学習の時間)

## 具体的な取組……2 保護者啓発・保護者を活用した自己肯定感の育成

道徳授業地区公開講座では、「子供の自己肯定感を育むために、地域・保護者のできること」という問いを立て、ワールド・カフェの手法で意見交流会を行った。ワールド・カフェとは、参加者がカフェのようなリラックスした雰囲気の中でテーマ（問い）についての対話を深めていくものである。グループ内で司会や書記といった役割はなく、全員が話し合いに参加し、一人一人の意見を尊重して聴き合い、つながりを意識しながら対話していく。出てきた意見や思ったこと

は、自由に目の前の紙に書き出していき、イラストや図で関係付けていく。

全学年の保護者、約 80 人が参加した。6・7人のグループとなって、丸い用紙を膝に乗せ、思い思いに意見交流し合った。初めて話す保護者同士でも、共通の話題を通して、共感し合う機会となった。数回のメンバーチェンジを行い、多くの人と交流することができた。

本校が取り組んでいる「自己肯定感を育む」ことに関して、保護者にも投げかけ、考えるきっかけを作ることができた。日頃話すことのない、違う学年の保護者と話すことができ、有意義に感じた方が多かった。

以下に、参加した保護者の声をアンケートより抜粋する。

#### ①肯定的な意見

- ・いろいろな方とお話しすることができ、また考えを聞くことができたので面白かった。
- ・自分の子と同じクラスや、学年の親しい決まった保護者とはしか話をする機会がないので、普段話さないようなことを異なる学年の保護者と行えたということが有意義だった。
- ・違う学年の保護者と話ができ有意義だった。日頃思っていることを再確認できた。
- ・親同士で感じていること、考えていることを共有できて、とてもよい時間をいただいた。
- ・ワールド・カフェのような企画には、また参加したいと思った。
- ・児童への言葉掛けを考えていきたい。

#### ②否定的な意見

- ・グループによっては、話がなかなか出てこず、沈黙がつかった。
- ・限られた時間内ですすめなければならないため、時間が足りないと感じた。
- ・もっと話し合いを深めたかった。
- ・講師の先生の話をもっと聞きたかった。

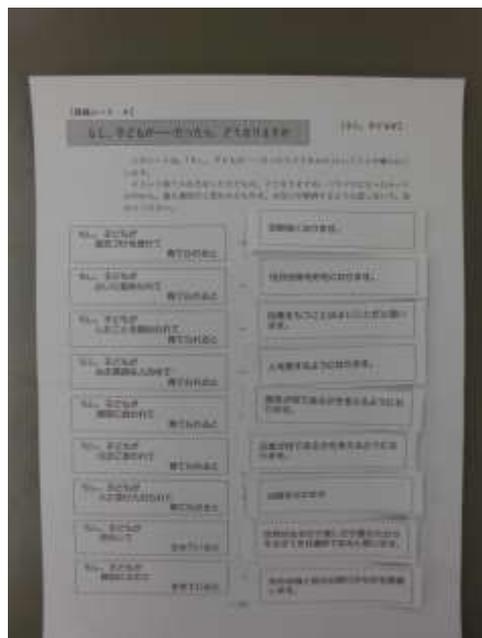
今後こうした交流を繰り返すことにより、保護者同士の考えや気持ちの交流ができ、保護者としての見方が広がったり安心感をもてたりして、子育てに余裕を持つことができるようになりわが子を肯定的に見ることができるようになる可能性が垣間見られた。



また、保護者会では以下のような取組も行っている。児童が体験していることをそのまま保護者にも体験してもらい理解を求めると同時に、保護者間の信頼関係構築や協働的・主体的な学びもつくっていくという入れ子構造になる。各プログラムの問いやテーマは、児童の自尊感情や自己肯定感を育むことについて考えていくように設定する。

①グループワークトレーニングで子供の教育を考える。

「もし、子供が」という題材である。子供に何をすればどうなるのか、よい結果と悪い結果の両方で合意形成をとりながら組み合わせていく。それぞれの家庭の教育方針が交流され、深まっていく。



②プロジェクトアドベンチャーを体験する。

7月の保護者会で、児童が体験したプロジェクトアドベンチャーを体験する。理解してもらうのと同時に、保護者同士のあたたかなつながりや、信頼関係の構築も図る。

③ワールド・カフェで子育てについて意見を交流する。

それぞれの家庭で大事にしている児童の教育観について意見を交流する。リラックスした雰囲気でおしゃべりをしてもらう。問いは、参加者に決めてもらうこともある。

④児童の家庭学習にフィードバックする。

児童の家庭学習ノートを机に置いておき、ギャラリーウォークをして、付箋でフィードバックを書いてもらう。児童の励みになると同時に、我が子の家庭学習の参考になるところを見付けてもらう。



### 具体的な取組…… 3 保護者との授業実践

授業参観ではなく、授業参画を目指す。授業の中で、情報を発信したり、社会人としての考えを述べてもらったりする。児童と対等な立場で参加し、保護者も児童を一人の小さな社会人として対してもらふ。すなわち、教える側と教えられる側という関係性ではなく、共に学ぶ仲間として臨んでもらう。

児童の考えに対して、「考えが浅い」とか「経験が足りない」から教えてやらねばいけないというような低評価の対応をすると、児童の自己肯定感は下がってしまう。それとは反対に、どんなに些細なことでも、どんなに稚拙なことでも、児童の考えたことを親身になって聞いてくれ、受け止めて対応してくれる体験は、確実に児童の自己肯定感を高めていく。自分の親だけでなく、友達のお母さんも自分の学びを真剣に支援してくれることも、さらに効果を高めていく。

教師は前もって、授業の目的と内容、方法等を伝えておき、準備をしてもらふ。保護者の方から授業に関して何かアイデアがあれば伺い、生かせるようであれば積極的に組み込んでいく。授業の最後に、保護者の方々から肯定的なフィードバックをもらい、児童の頑張りを認めてもらふ。さらに、家庭に帰ってからも会話の材料にしてもらふように働きかける。



5年 総合的な学習の時間



3年 算数



1年 図画工作

### 3 学習指導案

#### 第5学年 道徳の時間学習指導案

(1) 主題名 「キミならどうする？」 <3-① 自然愛護>

【資料名 VTR「サルも人も愛した写真家」(NHK)】

○ねらいとする価値について

自然の素晴らしさや不思議さに感動し、その自然を大切にしながら人間以外の動植物と共存の在り方を積極的に考えなければならない。そのためには、高学年では、「自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする」態度を育てなければならないだろう。人は「共存」のために大きな選択を余儀なくされることがある。その選択が正しかったか、そうでなかったのか、道徳の心の窓を通して考えることは、道徳心を育てるためには必要不可欠である。

(2) 資料について

NHKの教育テレビ「道徳ドキュメント」(小学校高学年道徳番組)の一話である。実際にあった出来事や人生体験をとり上げ、現実の問題として道徳を考えることを目的として制作された番組である。

「サルも人も愛した写真家」の内容を番組のチラシから引用すると、『天然記念物のサルによる被害に悩んだ村は、悪いサルの薬殺を決定。ある動物写真家に協力を依頼する。サルを愛してこの地に移り住んだ写真家のとった行動とは?』ということになるが、この写真家が追いつめられ選択しなければならないことは、自分の心に強く訴えていかなければ答えは見付からない。

(3) 研究テーマとの関連(道徳という教科の有用性)

集団の中では、どうしても意見が言えず、なんとなく時間が過ぎてしまっている児童は少なくない。もちろん、その理由として、分からないからとか、間違った答えを言うのがいやだからという場合もある。すべての教科でできるだけ多くの児童の意見を出させることは、その教科の特性もあり、なかなか難しいところである。道徳という教科では、答えが1つということにこだわらず、多種多様な解答を引き出すことが可能である。友達のいろいろな意見を聞き、自分とどこが同じでどこが違うかを把握し、自分の考えの正当性を感じることができれば自己肯定感につながっていくであろう。また、今回は地域の大人の方にも授業に参加していただき、同じ課題について直接意見を伺うことのできる絶好の機会である。自分の考えに賛同してもらえれば、より強い肯定感になるはずである。道徳という教科の特性として、知識の量や経験の深さにそれほど関係なく、心の感じたままを直接ぶつけあうことができる。そこには大人と児童の溝を気にせず、気持ちの共有ができる。より互いの気持ちの交流を図るために、ホワイトボードをグループごとの意見交換の場に有効に利用できるように工夫を講じてみた。意見を気持ちよく交わすことができれば、より交友関係も深まり、自分の存在を認められる充実感に発展していくだろう。この授業後に地域の人に笑顔ですすんで挨拶できるようになれば、新しい出会いの中から新しい自分を認識できるようになるであろう。

(4) 本時の学習

①ねらい

- ・「動物を愛する」だけでは、解決できない問題がある。(心の葛藤)
- ・野生動物と人間の共存のあり方を考える。

②評価規準

主人公の心の葛藤を通して、野生動物と人間の共存の難しさに気付くことができたか。

(5) 展開

	学習活動 予想される児童の反応	支援 (○) と評価 (◎)	地域保護者との連携
つかむ5分	◇ 日本の野生動物 ・日本の野生動物で知っているものありますか。 ・自然の中で人と動物がいっしょに暮らすには、どうすればよいでしょうか。	○写真等を提示	ネームプレート
考え 分 か り あ う  25 分	◇ VTR「サルも人も愛した写真家」前半を見て話し合う。 ・下北半島 野生のサル 天然記念物 ・松岡さんってどんな人。 ・問題発生 いったい何が！	○写真等を提示 言葉の意味・内容等で補足が必要な場合は説明を加える。	ビデオの視聴
	おばあさんから、「サルも嫌いだけどサルの写真を撮っている人はもっと嫌いだ」と言われたとき、どんな気持ちだったでしょう。		
	・私がした事なのか？ ・もう、こんなところにいたくない。 ・どうして私が嫌われなくてはならないの？ ・私が村の人のために何かできないか。	◎発表 (個)	一緒に話し合いに加わってもらう。
松岡さんはサルの駆除に「協力する」と思えますか、それとも「協力しない」と思えますか。			
	◇ホワイトボードに班ごとに出た意見をもれなく書きとめる。(グ) 協力する派 ・悪い事をすれば、人間もサルも同じ。 協力しない派 ・どうしてサルを殺さなくてはならないの。 ・他にも方法があったでしょう。 ・自分の家族のようなサルを殺せない。 ・どちらとも言えない (分からない) ・難しい ・決められない	みんなの考えを書いていこう	☆グループの中に入って一緒に話し合いに参加してもらう。
	◇話し合いで出された事を簡単に班ごとに発表する。(グ)	◎なぜそう思ったのか理由が明確になるように  ◎ホワイトボードに全員の意見を書きとめることができたか。	



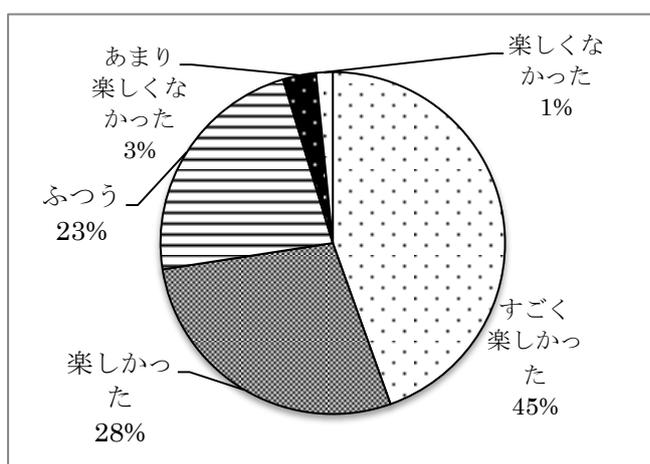
	<p>協力すると思う。 なぜなら……。</p> 		
た か め る	◇ VTR後半を見て話し合う。	◇ワークシート	
15 分	<p>松岡さんは、捕えられたハナピになんと呼びかけたと思いますか。</p> <p>◇ワークシートに記入(個)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ごめんよ</li> <li>・なんでいたずらやめなかったんだよ。</li> </ul> <p>◇ワークシートの発表</p> <p>◇本時の感想を書く。(個)</p> <p>◇「葛藤」という言葉について 《時間の余裕があれば》</p>	<p>◎ワークシートに自分の 考えを書くことができ たか。</p> <p>授業の振り返り 感想を書く</p>	<p>時間があれば、参加 された方にも感想を 伺う。</p>

#### 4 研究の成果と今後の課題

取り組みを行った後、児童・地域の方にアンケートを実施した。その結果が以下の通りである。

##### ◎児童のアンケート

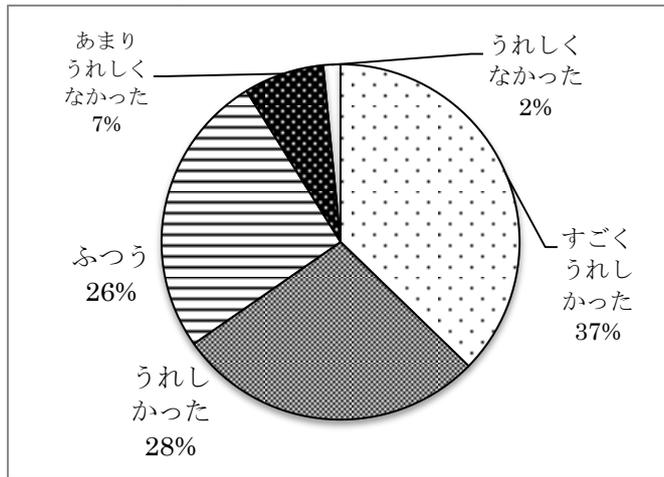
##### (ア) 地域の方が授業に来てくださって楽しかったですか



##### 肯定的な回答の理由

- ①ぞうきんの作り方を教えてもらい、ミシンが好きになった。
- ②ミシンが分からないとき手伝ってくれたから。待ってくれたから。
- ③お母さんが、いつもより優しく感じられ、すばらしい作品ができた。
- ④大人の意見が分かるから。
- ⑤秋を感じることで、思い出せなかったこと

(イ) 地域の方が授業に来てくださってうれしかったですか

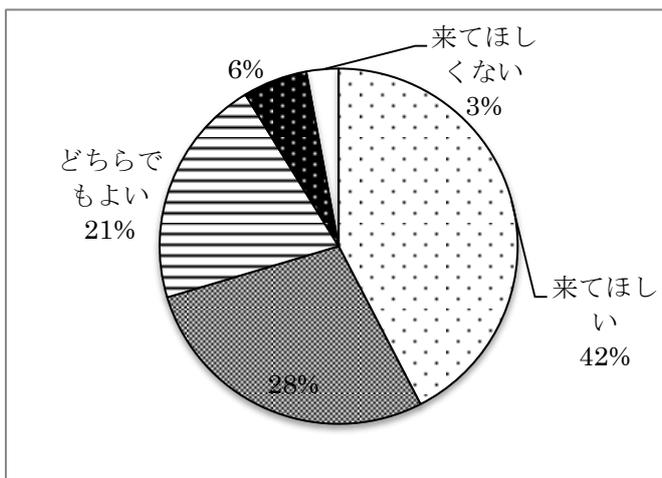


- を教えてください。
- ⑥計算をして答えが合っていたら、地域の人たちが拍手をしてくれた。
- ⑦一緒に作品を作るのが楽しかった。「いいね」と言われてうれしかった。
- ⑧迷路の作品が上手だった。
- ⑨地域の方の感想を聞いて、次からこうしようと思ったから。
- ⑩国語のプリントを見て、うなずいてくれたのがとても嬉しかったから。

否定的な回答の理由

- ⑪緊張していつもより少しやりにくい。
- ⑫見られると恥ずかしい。
- ⑬自分たちだけでがんばりたい。
- ⑭地域の方がいてもいなくても、変わらない。

(ウ) 今後も授業に来てほしいですか。



- ⑮学校の先生には分からないことを知っている。
- ⑯なんとなく落ち着くから。
- ⑰みんなに優しく接してくれ、みんなが笑顔になれたので、また来てほしい。
- ⑱一度来てくれた人は、話しやすい。
- ⑲間違えても大丈夫だと思ったから。
- ⑳先生だけのときよりも、集中してできる。
- ㉑たくさん大人の人がいたら心強いと思う。
- ㉒もっといいところを見てほしい。
- ㉓どんな授業をしているか見てほしい。
- ㉔もっと地域の方の意見を聞きたい。

- ⑮思い付かなかったことが出てくるから。

(エ) 学校外でお会いしたとき、どのように接したいですか。

- ⑳きちんと挨拶をしていきたい。(自分から)
- ㉑目を見て元気よく挨拶をしたい。
- ㉒「この前はありがとうございました。」と言いたい。
- ㉓「〇〇さん。」と名前と呼んでみたい。
- ㉔礼儀正しく接する。
- ㉕「また学校に来てください。」と伝える。
- ㉖お話ししたい。
- ㉗挨拶をしたり、助け合ったりしたい。



## ◎地域の方へのアンケート

### (ア) 関わりをもった時の児童の反応

- ①群馬県の形についていろいろ尋ねてきた児童がいた。上毛かるた、おじいちゃん、高速道路、と話しているうちに発想がどんどん広がっていった。
- ②作業が始まるとあちこちから「〇〇さん」と声がかかり、自然と児童と交流でき、会話ができた。作業が納得でき、進んでいくと、どの児童もたいへんやる気が出てきて、なんとか完成させたい、思うように縫ってみたい、という意欲が湧き出るのが感じられた。
- ③嬉しそうに見えた。同意、共感が得られたように思う。
- ④児童によって差があり様々だったが、何かが心に届いているに違いないと感じた。
- ⑤算数「おおよその数」を私に説明してくれたお子さんは、最初はめんどくさそうでしたが、途中から真剣な顔つきで教えてくれた。
- ⑥静かに聞く子供もいれば、言い返してくる子供もいた。
- ⑦話合いの段になって急に知らない人が参加してきて照れくさかったのか少し戸惑っている様子が感じられた。
- ⑧声かけをしても反応をみせない児童もいて気にかかった。

### (イ) 授業に参加してみたの感想

- ⑨生き生きとした児童たちと接することができて、元気をもらった。
- ⑩児童たちがとても素直で、にこにこしていて、とても嬉しかった。
- ⑪私も楽しい一時間を過ごせた。
- ⑫延べ5時間の付き合いだったが、結構顔見知りになり後日道で会って挨拶を交わした。
- ⑬指導者の一人として授業に関わりたかった。



#### (1) 成果

児童は地域の方や保護者が授業に参加することに抵抗なく受け入れて、楽しく授業を進めることができている。地域や保護者の方が授業で行った学習成果に対して目を配り、拍手や称賛などの即時評価を行ってくれたことで、児童は達成感を味わうことができた場面が数多く見られた。参加していただいた多くの学習において、できていなくても、共感し、どうしたらできるようになるか、共に考え見守るという役割を果たしてくれた成果と考えられる。その授業のほんの一瞬の何げない言葉がけにより児童が自信を形成し、児童の積極的な授業態度へと結びつつあると考えられる。このことを継続することで自己肯定感の育成も進んでいくと考える。また、地域や保護者の側から考えると本校の児童への理解が進み、地域で会った場合などに声をかけやすくなっ

たり、見守り安くなったりすることで学校を離れた場所での結び付きが強くなっている傾向が出てきている。このことは、共に考え、共に感じる、共感するなどこの分科会の核心になることが学校外にも広がるきっかけになっていると考えられる。そしてそれだけでなく地域や保護者の方の学校への信頼感が強くなっていることが分かった。また、当初は共に考え、児童の気持ちに寄り添い、共感する立場での関わりを手立てとしたが、児童は知らない人からでも教えられて「分かった」という達成感から自己肯定感も高まることが分かった。

以下に児童アンケートや地域保護者アンケートから考察できる事を述べる。

- ・母の対応が優しくなったと感じる児童の意見が出てきた。一緒に授業を受け活動したことで、家庭では見せない母の姿を見たこと、その姿に直接触れたことで、母の愛をより感じる事ができた。(児童のアンケート③参照)
- ・地域の方と児童の距離を縮めるよい機会となった。地域の方の児童への見方が変わってくる。まずはこのような場を設け地域の方と児童たちを近付けることが大切だと感じる事ができた。(地域のアンケート⑨⑩⑪参照)
- ・授業中の児童の様子を見て、地域の方に実態を知ってもらった。そして、個に応じた声かけをしていただき、児童の学習意欲が高まった。作品を見てもらい、褒められたり、共感してもらったりすることで、自信が増し、次の活動への意欲につながった。また、学習の準備が整わない児童に寄り添っていただいたことで、児童が「見守られている」と感じ、落ち着いて学習することができた。様々な場面で多くの児童も自分に振り向いてくれる人がいるということを感じる事ができた。(児童のアンケート①②⑥⑦⑩参照)
- ・同じ教材を地域の方と共有したことで、学習内容に関するいろいろな話をして、考えを広げることができた。特に高学年では、グループの一員として話し合いに参加してもらい、地域・保護者の方の意見から、自分では気付かなかったことを知ることができた。考えを広げられたことで自信が付き、学習への関心が高まり、活動がより豊かなものになった。(児童のアンケート④⑤⑧⑨地域のアンケート①②③参照)
- ・地域の方の顔を覚え、学校外でも挨拶を交わしたり、話をしたりする児童が増えた。「自分たちにいつも関わってくれている地域の方」ということを理解しての行動であり、本分科会の何よりの成果である。また、児童だけでなく教員と地域の方の交流が増えたことも、教育活動においてよい結果となった。(児童のアンケート⑳～㉓地域のアンケート㉔参照)

## (2) 課題

課題は地域と保護者の参加する授業のコーディネートの難しさが挙げられる。授業内容をしっかり吟味しなければ自己肯定感の育成という効果の上がる内容にはならないことが考えられる。以下に主な課題を述べる。

- ・保護者、地域の方と一緒に活動することに緊張する児童がいる。授業者が事前に何のために来てくれるのかを説明する必要があることである。(児童のアンケート⑪⑫地域のアンケート⑥⑦⑧参照)
- ・この活動において学校側の「指導者としてではなく、心理的に児童に寄り添い、見守る立場」というねらいを地域の方に理解していただくには、しっかりと時間をとることが必要である。管理職、授業者、地域の方、みんなで話し合いねらいを共通理解するための十分な時間をとらなければならない。(地域のアンケート⑬参照)
- ・様々な経験、特技をより一層生かしていただくために、授業者は保護者、地域の方を理解し、授業をコーディネートする必要がある。(児童のアンケート⑭参照)

- (1) 単元名 「秋の風景」
- (2) 単元目標
  - 秋の風景に興味をもち、それに関わる語句を増やすことができる。
  - 秋の風景から想像を広げ、詩を書くことができる。
- (3) 本時のねらい (1/2)
  - ・秋を感じる風景に関心をもち、秋を表す言葉を集める。
- (4) 本時の展開

	学習活動	地域・家庭との連携における留意点
導入	1 秋を意識する。 夏との違いに目を向けさせ、どんな変化があったか意見を出し合う。	・同じ視線で授業に入っていただくため、児童机を用意し、児童の列の並びに席をおく。
展開	2 秋を表す言葉を書き出す。 イメージマップに自分の考えを書く。 3 班で意見を発表する。 自分の意見を詳しく発表をする。友達の意見を聞き、付け足しをする。 4 全体で意見を発表する。	・同じプリントを用意し、活動に取り組んでもらうよう声をかける。 ・全ての班に順番に入り、どんなもの考えたのか発表する。また、児童の意見を聞く。
まとめ	5 次時の活動について知る。	

- (1) 単元名 「かいだんアート」
- (2) 単元の目標
  - ◎テーマを考え、自分の迷路を作ることができる。
  - 友達と迷路がつながるよう、試しながら協力して進めることができる。
- (3) 本時のねらい (1/2)
  - ・自分のテーマに合った迷路を作成し、友達と試し合いながら作る。
- (4) 本時の展開

	学習活動	地域・家庭との連携における留意点
導入	1 友達とつながる迷路の道の作り方を 知る。 2 自分のテーマを決める。 ○○ゾーン, ○○の道など 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域・家庭の方が簡単な自己紹介をする。</li> <li>・同じ視線で授業に入っていただくため、児童と同じ席に座る。</li> </ul> 
展開	3 自分のテーマの迷路を鉛筆で下書き する。 4 色を塗る前に、友達とつながるか確 認をする。 5 色を塗って、完成した人から少しづつ つなげていく。(早く終わった人がつ なげる係) 6 全体で意見を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じプリントを用意し、活動に取り組んでもらうよう声をかける。</li> <li>・同じように、児童と迷路をつなげ、確認する。</li> <li>・どんな迷路ができたか、つくりながら児童の話を聞く。</li> <li>・一緒に作品を作ってみた感想を話す。</li> </ul> 
まとめ	7 次時の活動について知る。	

- (1) 単元名 「トートバッグ作り」
- (2) 単元の目標
  - ミシンを安全に使用することができる。
  - ミシンの基本的な操作（返し縫、布の方向を変える）を理解する。
- (3) 本時のねらい（1／2）
  - ・トートバッグを作る前段階として、ぞうきんを作り、ミシンの基本的な操作を練習する。
- (4) 本時の展開

	学習活動	地域・家庭との連携における留意点
導入	1 ぞうきんの作り方の手順を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域・家庭の方が簡単な自己紹介をする。</li> </ul>
展開	2 ミシンをセットし終わったら、各自ぞうきん作りを始める。  3 ぞうきん作りが終わったら、好きな模様を一筆書きで縫う。 4 全体で意見を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前回休んでいた児童、ミシンのセットが完了していない児童につく。</li> <li>・困っている児童のところについて、一緒に進める。</li> </ul>   <ul style="list-style-type: none"> <li>・ある程度児童の活動が落ち着いたら、自分のぞうきん作りを行う。</li> <li>・一緒に作品を作ってみた感想を話す。</li> </ul>
まとめ	5 次時の活動について知る。	

資料 4

地域の皆様へ

平成 27 年 9 月 日

西京京華立学小学校長  
夫野尊久

秋涼の候、皆さまには、ますますご清祥にお過ごしのことと存じます。日ごろより、本校の教育にご理解とご協力をいただきまして深く感謝しております。

さて、本校は今年度、2月9日に研究発表を閉じております。テーマは、「自分大好き！樂の子—自分の良さを認め、自己肯定感を育む授業—運動の工夫」です。このたび、研究経緯の4分科会の中の「地域・保護者との連携分科会」では、研究テーマの実現に向けて下記のように、地域、保護者の皆様にもご協力をいただきたいと思っております。お忙しいと存じますが、樂小の子供たちの更なる成長のために、お力添えを賜りたくお願い申し上げます。

記

1 自己肯定感とは

2 自己肯定感を高めるために

- ・ 地域の方や保護者に温かく見守られていることを実感させ、自分が一人ではないこと、多くの人たちに支えられていることを感じ、自分の居場所を見つけられるようにする。
- ・ 多くの方々の目で、間違ったことを論じられたり正しい行いに感謝されたりほめられたりすることで、自分の存在意義を確認する。
- ・ 実際に授業を通して触れ合うことで、自分を見守ってくれている方たちをより身近に感じさせ、交流を深める。

3 交流の仕方

- ・ 10月8日(月)から10月20日(金)の期間、1校時から8校時の間でご都合の良い日時を教えてください。
- ・ 学校から、ご見舞いいただく日時をご連絡します。
- ・ 授業についての簡単なご案内を、内容によって、電話やFAX、授業前の休み時間などでさせていただきます。

資料 5

○ご都合の良い日時を書きの表でお知らせください。

	10月6日(月)	10月6日(火)	10月7日(水)	10月8日(木)	10月9日(金)
1校時					
2校時					
3校時					
4校時					
5校時					
6校時					

	10月10日(土)	10月13日(火)	10月14日(水)	10月15日(木)	10月16日(金)
1校時					
2校時					
3校時					
4校時					
5校時					
6校時					

	10月19日(月)	10月20日(火) 特別時間	10月21日(水)	10月22日(木)	10月23日(金)
1校時					
2校時					
3校時					
4校時					
5校時					
6校時					

資料 6

協力者一覧(4/3)

	26日(月)	27日(火)	28日(水)	29日(木)	30日(金)
1校時 8:45~ (場所)					
2校時 9:35~ (場所)					
3校時 10:45~ (場所)					
4校時 11:35~ (場所)					
5校時 1:35~ (場所)					
6校時 2:25~ (場所)				5の1通廊 作山・橋本 西田・( ) ( )・( ) 4階5-1教室	

資料 7

本日は、お忙しい中、本校の教育活動にご協力いただきましてありがとうございます。どうもよろしくお願ひします。

月 日 (木) ・ 時間目

年 組 ( 時間目) 年 組 ( 時間目)

① 教科名

② 学習するクラス

③ 授業者名

④ 場所

⑤ 授業の内容

⑥ 地域の皆様へのお願い

初めての秋祭です。子供たちが、こんな風に温かく見守ってくれている方たちがいてくれるということが実に嬉しかった。それだけで感動があると考えています。いつも温かく、時に優しく、自分に心を許す機会、怒り、悔いてくれる方の存在は、それだけで、子供たちの自己肯定感を高めると思うのです。それでは温かくない。日本の子供たちは、地域の方にも支えられ、色んなことを教わったり、褒めてもらったりしながら、日々を過ごしていたらいいなと思います。授業後を持っていくと「いつもありがとう」と言われました。朝、登校に準備ができて、「今日は元気だね、気を付けてね」と送り出されました。今、その機会を覚えてもらえればいい時代になっていると思うのです。そこから、この「地域・家庭の連携分科会」は始まりました。どうぞ、地域の皆様も、自然体で子供たちを見守っていただけたらと思います。

(案内文正例)

- ・ 授業に設置する作品を作ります。一人一人が作った連絡がつながって、大きな作品になる予定です。地域の方が作った作品も子供が作った作品の間につながって、連絡の一部になっていきます。連絡が来ることになるかどうか、確認しながら子供と一緒に楽しんで参加して頂けたらと思います。最後に簡単な自己紹介をして頂き、授業の終わりにご感想をお聞かせください。(園児)
- ・ 授業と一緒に連絡係員にお願いいたします。学習や指導というスタンスではなく、地域・保護者の皆様が児童と一緒に立場や子供の行動に参加していただくことで、地域や児童を見守る大人たちが子供にとって安心できる存在になっていくことを目指しています。一度多りの関わりで可能なこと、繰り返しの関わりで獲得していくことなどですが、児童にとって多くの大人が安心できる存在であることを祈ります。本校児童が持つ自覚や誇りを、真の力で支えていくことを考えています。どうぞ児童と一緒に参加していただき、終わりにご感想をいただいたらご報告させていただきます。(連絡係員)
- ・ 秋を感じる風景や音など子供たちと一緒に考えたいと思っています。連絡係員は少し難しい言葉も出てきますが、参観にあるもの(所作や声やもみじなど)がたくさん出てきたらいいなと思っています。その際、子供達は出てきた言葉を使って詩を書く活動を行います。(園児)
- ・ 5時間目は祭りを促した活動。6時間目は連絡について、予定し、話し合い、実施をしてまとめる指導です。最後は感想を書いた後、子供たちもはげみになると思いますので、よろしくお願ひします。(園児)
- ・ 家庭科の授業で初めてシソを使う年生。上流のかけ方、下流の出し方も難しい。まして年を繰り返して・・・今年度の授業は、シソの栽培に促されるために、「掛け作り」をします。お願ひしたいことは「那須園芸園」にある児童には、アドバイスが「がんばっている児童をたいに褒めて」「種が先成したら、葉っぱを共有してください」(園児科)
- ・ 授業の中で、ゲームを取り入れた学習があります。私ども初めての経験なので楽しみます。子供たちと一緒に楽しんでいただけたらと思います。「大人もこんな風に楽しむときがあるんだ、なんだ、ぼくたちと一緒にじゃない」と思えたらいいなと思っています。(園児)

資料 8

アンケート 甲 越 ( )

① 地域の方が授業に来てくださって、どのように感じただしょうか。

楽しかった 楽しくなかった

5 4 3 2 1

うれしかった うれしくなかった

5 4 3 2 1

② どの教材が1ばんよかったですか？ ( )

それはどうしてですか？

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

③ 地域の方にこれからも授業に来てほしいですか？

来てほしい 来てほしくない

5 4 3 2 1

それはどうしてですか？

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

④ これから、地域の方とどんなことをしたいですか？

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

⑤ 学校の外でお会いしたとき、どのように話していきたいですか？

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

資料 9

平成27年 3月 日

地域の皆様へ

越前町の立派小学校 校長 齊藤

昨日のご挨拶は、誠にありがとうございました。

地域の皆様には、学校の教育活動にご協力いただきまして深く感謝しております。また、このたびは、お忙しい中、例年より早くにもお越しくださいまして、重ねてお礼申し上げます。

すでにいくつかの授業に入っていたりしておりますが、どのような感想をおもちになっても構いません。

「地域・家庭との連携分科会」としましては、授業に入っていた子どもたちの様子を見ていただけたら、それだけでも大きな励みとなります。どのような子どもたちと関わっていただいても構いません。

当然ながら、遠くから来てくださる皆様には、大変なご負担をおかけしていただいております。子どもたちが喜んで参加したり、にこにこしている姿の当たり前に、ありがたいことと感謝しております。子どもたち、温かく自分の関わり方してくれる人をお見かけしていただくことを願っております。

また、もしよろしければ、授業中の子どもたちを見て、少しお話しになったことをお話しいただけたらと思います。【書き添えするご用紙が備わっておりますので、書いていただけるようお願いいたします。】

① 子どもが、授業に参加してまたお話しを聞きたい、どんなことだったでしょうか。また、子どもが、授業中、うれしそうにして楽しそうにしていただけたら、どんなことだったでしょうか。

② 子どもが、授業中に出てきたことなどどんなことだったでしょうか。

③ お話しを聞いたり具体的に子どもたちに関わってくださったとき、子どもの表情などがどのように変わったでしょうか。

④ 子どもとの関わりの中でお気づきのことがありましたら、お書きください。

※このアンケートは、授業時間にお持ちいただくか、FAXでお送りください。お返事をあかせませんが、よろしくお願いたします。

# 視点5『教師の在り方』

## 研究推進部まとめ



## V 教師の在り方

視点1から4までの全てに関わる重要な視点が、「教師の在り方」である。例えば、信頼関係を構築する様々なアクティビティや主体的な学び、振り返りの際の教師の在り方は、今までの教師の在り方とは違うものになるだろうと考えた。すなわち、上記のような児童の活動には、ただ単に「指導する」というこれまでの教師の一般的な在り方とは違う要素が必要になってくるからである。

以下、目指す児童像にせまるために必要な要素をまとめてみる。

### (1) 児童の気づきで信頼関係や学びを構築する。

本研究の一連の手法が、児童が学習活動や体験の中から気付いたことを一般化し、学びを構築するという形であることは、教師側からの一方的ないわゆる講義型の指導・教授という授業形態には、そぐわない場面が出てくるであろうと考える。教師が、既存の知識や情報、価値観を分かりやすく伝え教えるという立ち位置から、児童が知識や情報、価値観を獲得したり新しく創造したりするための支援を行うという立ち位置に変化していかなければならない。必然的に、授業形態も、教師の教えやすさよりも、児童の学びやすさを優先して考えていかなければならない。児童が受動的ではなく、能動的に学習や活動に参加できるように促していき、児童の自己有用感を育んでいく。

### (2) 共感的、受容的、肯定的に受け止め、過剰な判断を避ける。

児童の気づきから構築した学びに対して、その正否を判断したり、教師の一方的な判断を押し付けたりすることを避けなければならない。それが繰り返されると、児童は教師のもつ「正解」を探し始めてしまうであろう。そして、自ら主体的に学ぶことを放棄するであろう。明らかに間違いだと分かったとしても、それを指導の中では質問の形で伝え、改善のための判断や、問題発見や解決に必要な情報の収集・蓄積は児童に委ねていくことが必要であると考え。児童の話にじっくりと耳を傾けて聞き、真摯に受け止め、共感することから始め、児童の自尊感情を高めていく。

### (3) 質問のスキルを身に付ける。

上記のような、間違いをただ単に指導するのではなく改善ための質問として伝えるとともに、発問の仕方やタイミング、指導目標との関連などのスキルは様々な場面で非常に重要になると考えられる。児童の主体的な判断を促したり、振り返りの焦点をはっきりとさせたりする時など、児童の学習の流れや思考力、判断力、表現力等を高める役目をすると考え。よい質問や問いは、学習活動中の見取りや児童との対話の中から生み出されていく。教師は、児童の学習状況の中で、その時、その場に必要で効果的な質問を用意できるスキルを身に付けることが必要だと考える。

### (4) 指導と支援の兼ね合いを考える。

全てを児童に委ねるわけではなく、必要に応じて「教える」場面も必要になる。児童の学習活動の状況を見取り、全体で確認したり共有したりすることが必要だと判断したときは、一斉指導をする。また、学習の展開上、初めにしっかりと方法や知識を教えたり、情報を伝えたりしてか

ら個々の学習活動に移らせる場合もある。どこを任せ、どこを教えるか、そのバランスを児童の実態に合わせてとっていくことが必要である。個々人の対応でも同様であり、これらも、児童の学びやすさを考えて実践を積み重ねていくことにする。

【資料】 赤城移動教室で引率指導者に配布した「ファシリテーターマニュアル」より抜粋

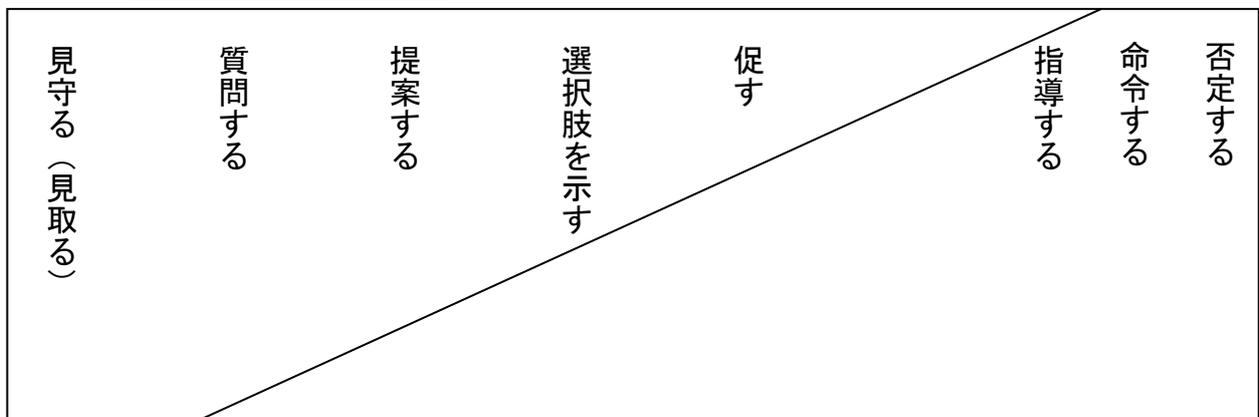
## ファシリテーター及び観察者としての在り方

子供たちの「気付き」を学びの主体としていますので、「教える」ということはほとんどありません。気付かなければ、また活動を繰り返すだけです。介入するとすれば、「質問」という形態をとることになります。さらに提案、選択、促す…。命令までいったらもうそれは体験学習ではありません。（危険を回避する時、児童の心と体の安全が守られていないと判断した時は積極的に介入してください）

ですから、子供たちがアクティビティを体験中は、口出しは無用です。ジェスチャーもダメ。静かに見守っていて下さい。どうしても先生というのは、「こうしなさい」「こうしたほうがいい」と言いたくなってしまいますが、それをぐっと我慢してください。アクティビティが終わった後でも、言うてはだめです。「あれはこうすればよかったんだよ」なんてこと言わなくていいです。その時点で、子供たちは自分たちの体験から気付いたことを放棄してしまいます。

もうひとつは、もし「質問」するとしても、結果ではなくプロセスに焦点を当ててほしいということです。そのイニシアティブのアクティビティの解決方法について質問したってなんの意味もありません。どうしてかという、そのイニシアティブのアクティビティができるようになったって人生において何の役にも立たないからです。それよりも、課題解決に向かっていったプロセスに焦点をあてた質問をしてください。そのことは、人生において役に立ちます。「何か一つの問題が起こったとき、個人（またはグループ）はこういう方法で乗り越えていった」という気付きは、この後のいろいろな場面で役に立ちます。そのアクティビティの結果が成功であっても失敗であっても、それについて振り返り、次への指針とすることができるのです。結果にこだわり、成果尊重主義に陥らないようにしましょう。

児童の自由度



教師の介入度

# 研究の成果と課題



## 研究の成果と課題

### 1 調査結果の考察

児童の変容を測る調査は、全学級、【自尊感情測定尺度(東京都版)】「自己評価シート」を使用した質問紙法による調査である。調査項目は、自尊感情を構成する3つの因子によって構成されている。3つの因子とは以下の通りである。

A 自己評価・自己受容

自分のよさを実感し、自分を肯定的に認められることができる。

B 関係の中での自己

多様な人との関わりを通して、自分が周りの人の役に立っていることや、周りの人の存在の大切さに気付いている。

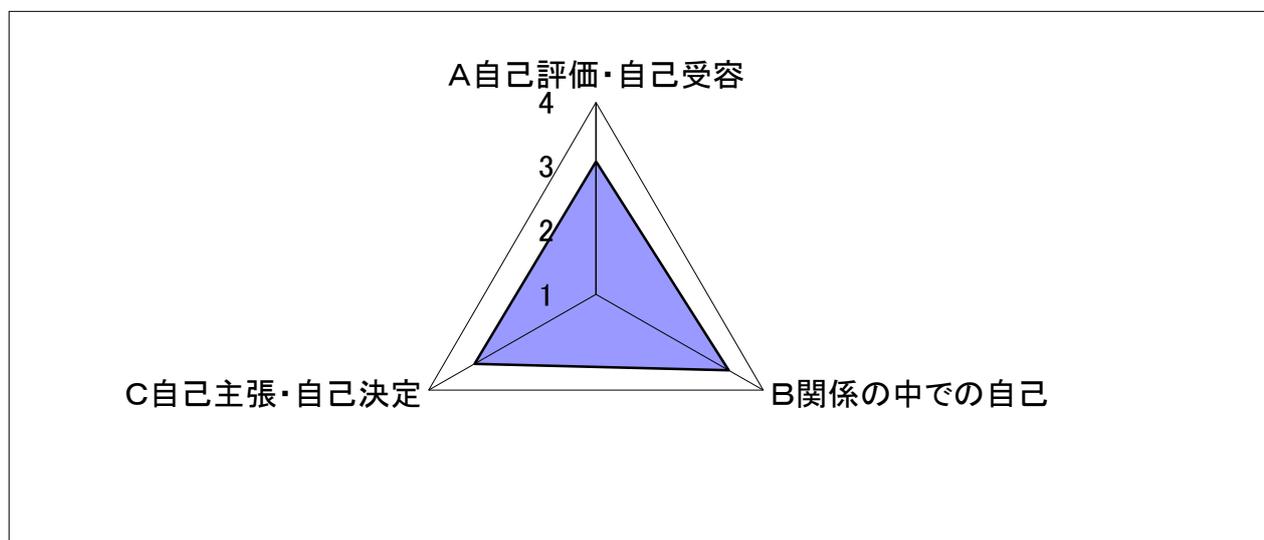
C 自己主張・自己決定

今の自分を受け止め、自分の可能性について気付いている。

質問項目は以下の22問である。(4年生～高校生用調査用紙)

- 1 私は今の自分に満足している。(A)
- 2 人の意見を素直に聞くことができる。(B)
- 3 人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる。(C)
- 4 私は自分のことが好きである。(A)
- 5 私は人のために力を尽くしたい。(B)
- 6 自分の中には様々な可能性がある。(C)
- 7 自分はダメな人間だと思うことがある。(A)
- 8 私はほかの人の気持ちになることができる。(B)
- 9 私は自分の判断や行動を信じることができる。(C)
- 10 私は自分という存在を大切に思える。(A)
- 11 私には自分のことを理解してくれる人がいる。(B)
- 12 私は自分の長所も短所もよく分かっている。(C)
- 13 私は今の自分は嫌いだ。(A)
- 14 人に迷惑がかからないよう、いったん決めたことには責任を持って取り組む。(B)
- 15 私には誰にも負けないもの(こと)がある。(C)
- 16 自分には良いところがある。(A)
- 17 自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している。(B)
- 18 私は自分のことは自分で決めたいと思う。(C)
- 19 自分は誰の役にも立っていないと思う。(A)
- 20 私には自分のことを必要としてくれる人がいる。(B)
- 21 私は自分の個性を大事にしたい。(C)
- 22 私は人と同じくらい価値のある人間である。(A)

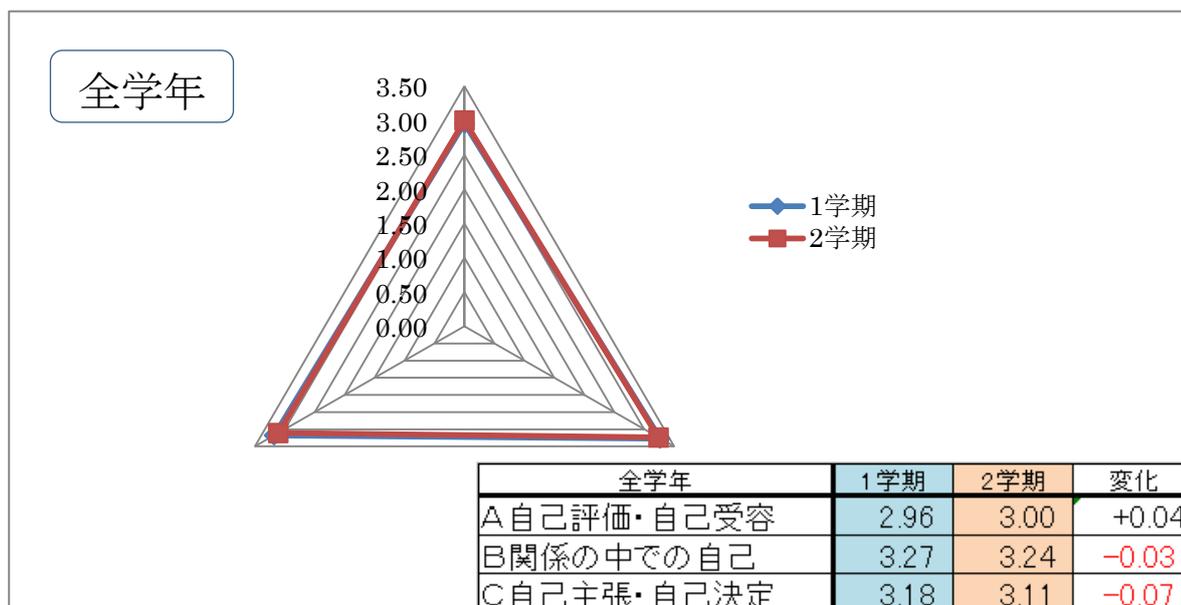
年度当初の4月に1回目のアンケートを実施し、2学期の11月に2回目のアンケートを実施した。3因子の調査結果は、集団傾向と個別傾向の2つに分けて以下のレーダーチャートにグラフ化することができる。



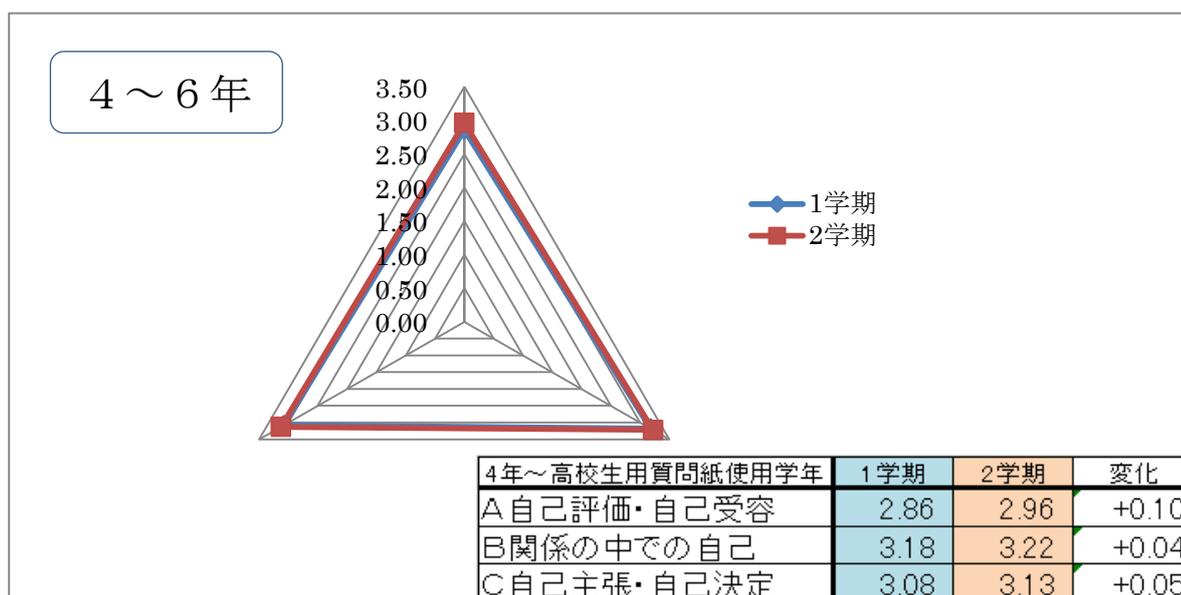
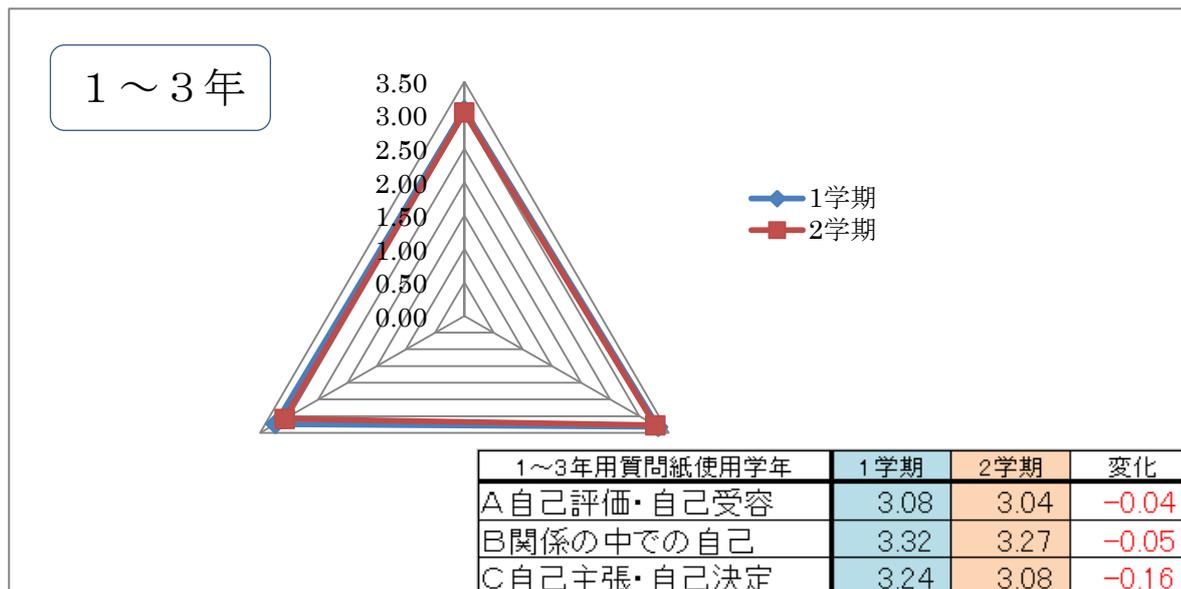
※ 各項目とも4…あてはまる、3…どちらかといえばあてはまる、2…どちらかというとはまらない、1…あてはまらないの4段階評価になっている。(反転項目は処理済み)

以下、集団傾向を、学校全体、高学年低学年別、学年別に分け、数値的な変容を示していくことにする。

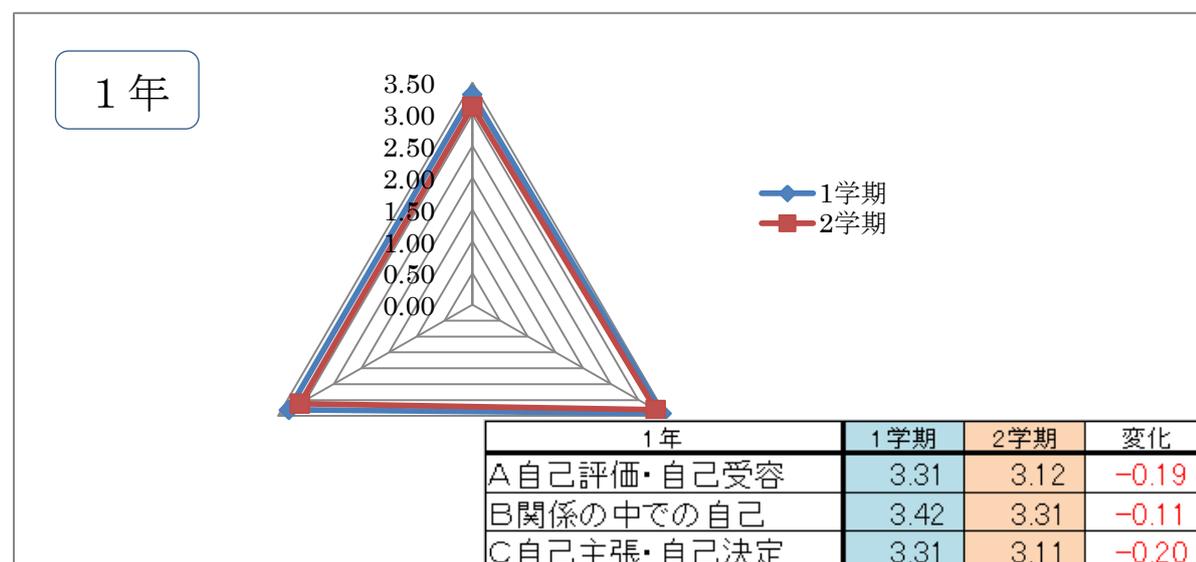
(1) 学校全体の集団傾向の変化 (平成 27 年 4 月～11 月)



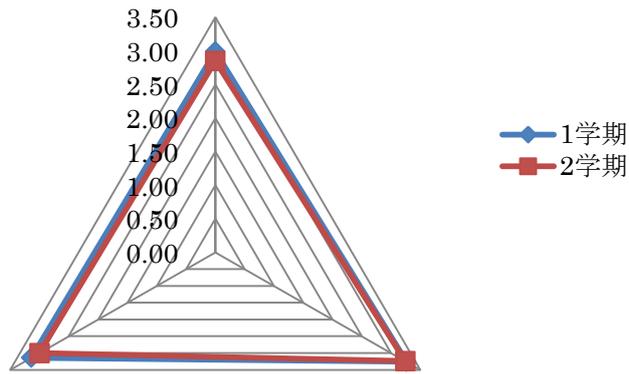
(2) 質問紙別集団傾向の変化（1～3年生用と4年生～高校生用の2種類の質問紙を使用）



(3) 学年別集団傾向の変化（6年生に関しては、学級編成・担任同一のため2年間の変容）

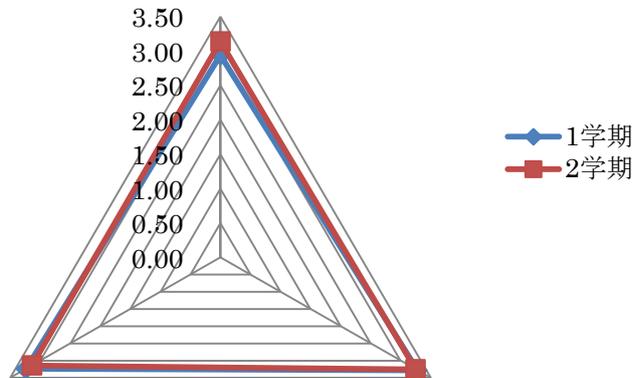


2年



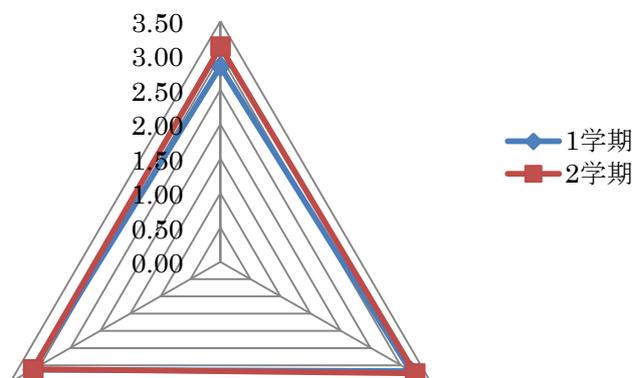
2年	1学期	2学期	変化
A自己評価・自己受容	2.99	2.85	-0.04
B関係の中での自己	3.26	3.24	-0.02
C自己主張・自己決定	3.14	3.00	-0.14

3年



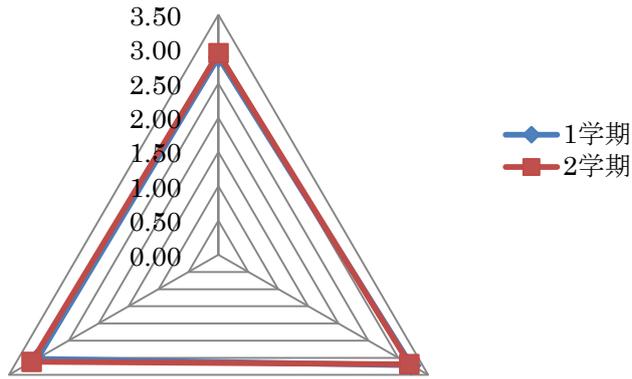
3年	1学期	2学期	変化
A自己評価・自己受容	2.94	3.14	+0.20
B関係の中での自己	3.28	3.25	-0.03
C自己主張・自己決定	3.24	3.14	-0.10

4年



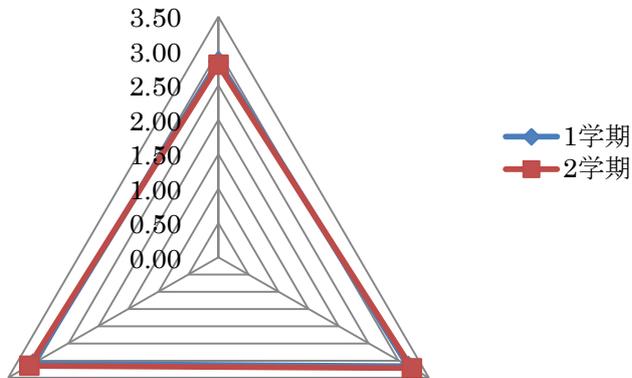
4年	1学期	2学期	変化
A自己評価・自己受容	2.84	3.13	+0.29
B関係の中での自己	3.17	3.24	+0.07
C自己主張・自己決定	3.13	3.12	-0.01

5年



5年	1学期	2学期	変化
A自己評価・自己受容	2.88	2.94	+0.06
B関係の中での自己	3.22	3.19	-0.03
C自己主張・自己決定	3.03	3.12	+0.09

6年



6年	5年1学期	6年2学期	変化
A自己評価・自己受容	2.85	2.80	-0.05
B関係の中での自己	3.16	3.22	+0.06
C自己主張・自己決定	3.09	3.15	+0.06

【考察】

2年間の研究で学校全体の集団傾向に、数値的には大きな変化は見られなかった。しかし、本校児童の自尊感情については、5、6年において東京都教職員研修センターの調査結果（右図）と比較してみると、ほぼ上回っている現状が見られる。そして若干ではあるが、B「関係の中の自己」の数値は高く、プロジェクトアドベンチャーなどの信頼関係を構築するアクティビティや、協働的な活動や授業の工夫の結果ではないかと考える。一方で、栄小学校全体の傾向としてでは、大きな変化は数値的には表れなかった。しかし、児童の個々の変容を見ると、著しく数値の上がった児童が数多く確認できた。（詳しくは信頼関係構築分科会のページ参照）

つまり、児童はそれぞれの特性、強みや弱みが違っており、個別な指導であれば自尊感情を伸ばすことは比較的手だてを立てやすいが、集団として一律に同じ指導により自己肯定感を育成することは難しいことが分かった。そこで、教師は児童の見取りや対話の中から個に寄り添った支援の手だてを考えていかなければならないと考える。

因子	A	B	C
5年生	2.94	3.13	3.05
6年生	2.86	3.04	3.12

平成23年度輝京都教職員センター  
研究紀要資料より抜粋

## 2 研究の成果と今後の課題

### (1) 振り返る力が高まり、自分を深く見詰め、受け止めることができるようになった。

#### (成果)

##### ○児童のメタ認知能力が付いた。

振り返りジャーナルや日々の授業・活動での振り返りを継続的に行ったことにより、児童のメタ認知能力が上がり、学習内容や諸活動についての取組やその取組を行っている自己について深く振り返る力が付いた。

##### ○「自分を見詰め、ありのままの自分を受け止める」ことはできるようになってきた。

振り返りの視点を表面的な内容の理解や課題の到達度だけに留まらず、その過程や、自分がどう関わったのか、そういう自分についてどう思うのか等、自己の内面に焦点を当てた成果である。

##### ○児童が見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現した。

振り返りジャーナル導入当初に児童は、「～だったのでよかったです。」という記述が非常に多く、良い、悪いの二面的な自己評価を振り返りとして行っていた。また、「よくなかった」という自己評価には、「次は頑張りたいと思います。」でくられる終わり方がほとんどで、理由も、具体的な目標設定もなく、型通りに書いていた児童が多かった。しかし研究を進める中で、児童に振り返りの意味と目的、方法等を繰り返し説明し、教師側も視点や問いをねらいに応じて考えることで徐々に変化が表れ始めた。児童の中に「どうやったか」「どのように考えるか」などの振り返りの必要性や意義を感じ始めた。課題にどう関わったか、人とどう関わったか、体験したことを掘り起こし、それにはどういう意味があるのかを考え始める児童が出てきた。

#### (課題)

○自分を好きと思えたり、自分のよさを認めたりするという点での集団的な変容は、アンケート結果に成果として大きくは表れていない。しかし個別に見ると確実に変容している児童が見受けられている。

#### (対応策)

○個別傾向で成果のあった児童の分析を進め、効果のあった手法を精選して今後の取組例としていく。

○よさを認められるように、個人の変容の分析を進め、手だての方法を考えていく。

### (2) 信頼関係を育み、安心して自分を出せる学習環境をつくり出すことができた。

#### (成果)

##### ○信頼関係を構築するアクティビティや言語活動は、確実に児童の対人関係性を良好な状態に変容させている。

児童にインタビューすると、児童の自己肯定感や自尊感情に影響を与える要因は、実に多岐に渡るということが分かった。学校教育以外での影響が大きい児童も多い。インタビューの結果多かったのが、人間関係に関する要因である。それは、関係性の改善や、他者からの好意的なフィードバック、称賛に関係するところであった。児童間、親子間、対教師との関係性の中で児童は自尊感情を育んでいるのだということが分かった。本研究で進めてきた信頼関係を構築するアクティビティや言語活動は、確実に児童の対人関係性を良好な状態に変

容させている。その基盤の上で、さらに工夫された授業や活動が行われたことは、児童が安心して自分を出せ、新たな学習課題に挑戦する意欲を生む結果となった。

(課題)

- 児童の実態をよく見取り、より具体的に個に寄り添った支援を行っていくことが必要となる。
- 児童にとって常に教師が居心地のよい安心できる人間であることと、信頼関係で結ばれたよき支援者であることが必要とされる。

(対応策)

- 信頼関係を育み、より一層の個に寄り添った支援を行う。

(3) 協働的、主体的な活動が、児童の自己決定力や思考力、判断力、表現力を伸ばしてきた。

(成果)

- 自己主張する力や自己決定力が付いた。

児童が自ら学びを構築していく協働的、主体的な活動や学習を展開したことで、自己選択、自己決定の場を数多く体験し、自己主張する力や自己決定力が付いた。また、自分の長所や短所を知ることができ、それを生かして自分独自の思考、判断、表現をすることができた。

- 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できた。

問題発見・解決という学習プロセスの中で深い学びの過程が実現しており、思考力、判断力、表現力の育成という今後のアクティブ・ラーニングが本格的に導入されれば、本研究で取り組んだことで授業デザインの活用ができ、学力向上に活用することができる。

(課題)

- 教科のねらい達成に理解や実践を積み重ねる必要がある。特に協働的、主体的な学習活動は、これまでの教師の在り方も大きく変容が必要である。各教科・領域の指導観と共に改めて考えていくことが課題である。

(対応策)

- 教師の授業力アップのために今後の校内研究・研修、OJTで、授業力を高めていく。

(4) 学校、地域、保護者の連携の力を実感でき、成果を上げることができた。

(成果)

- 保護者の活動や授業への参画を促す、開かれた学校・教室から児童の自尊感情は高まった。

地域団体に協力してもらって行った各授業への参画は、児童に自分たちは様々な人たちに支えられているのだという意識をもたせることができた。自分は大切にされている存在であるという意識をもてたことで、児童の自尊感情は高まり、あたたかなフィードバックや賞賛をもらえたことで、自己肯定感が高まった。

(課題)

- 児童にとって一番身近で大切な存在である保護者が、いつも近くで自分たちの学びを見守っているということを自覚させることが課題である。

(対応策)

- 今後、保護者の授業や活動への参画をより一層進めていけば、さらなる自尊感情の高まりを生んでいくと考える。
- 今後さらに研究を継続し、長期の経年変化で変容を見取り、検証を行っていく。

## 参考文献・資料

### 【研究紀要】

『自身 やる気 確かな自我を育てるために』～子どもの自尊感情や自己肯定感を高める教育の充実に  
向けて～

東京都教職員研修センター研究紀要(平成 21～25 年度)

『自己の価値や役割を自覚し、自己肯定感を高め学習に取り組む児童の育成』

東京都西東京市立芝久保小学校(平成 22・23 年度)

『自己肯定感を高めてよりよい人間関係が築ける児童の育成』

東京都港区立港南小学校(平成 26・27 年度)

『自尊感情や自己肯定感を高め、進んで実践しようとする子供の育成』

東京都町田市立町田第五小学校(平成 24・25 年度)

### 【プロジェクトアドベンチャー関係】

『クラスのちからを生かす』教室で実践するプロジェクトアドベンチャー

プロジェクトアドベンチャージャパン (2013 年 みくに出版)

『グループのちからを生かす』プロジェクトアドベンチャー入門

プロジェクトアドベンチャージャパン (2005 年 C.S.L 学習評価研究所)

『みんなのPA系ゲーム243』

諸澄敏之編著 (2005 年 杏林書院)

『楽しみながら信頼関係を築くゲーム集』

高久啓吾 (1998 年 学事出版)

### 【信頼ベースの学級ファシリテーション・ホワイトボードミーティング関係】

『よくわかる学級ファシリテーション①』かかわりスキル編

岩瀬直樹 ちょんせいこ (2011 年 解放出版社)

『よくわかる学級ファシリテーション②』子どもホワイトボードミーティング編

岩瀬直樹 ちょんせいこ (2011 年 解放出版社)

『よくわかる学級ファシリテーション③』授業編

岩瀬直樹 ちょんせいこ (2013 年 解放出版社)

『よくわかる学級ファシリテーションテキスト』ホワイトボードケース会議編

岩瀬直樹 ちょんせいこ (2012 年 解放出版社)

『ちょんせいこのホワイトボードミーティング』

ちょんせいこ (2015 年 小学館)

『ファシリテーターになろう!』6つの技術と10のアクティビティ

ちょんせいこ (2014 年 解放出版社)

『話し合い活動ステップアッププラン』

ちょんせいこ (2014 年 小学館)

『最高のクラスの作り方』

岩瀬直樹 荻上由紀子 埼玉県狭山市立堀兼小学校6年1組 (2010 年 小学館)

『クラスづくりの極意』

岩瀬直樹 (2011年 農村漁村文化協会)

### 【協同学習関係】

『協同学習入門』 基本の理解と 51 の工夫

杉江修治 (2011年 ナカニシヤ出版)

『協同学習でどの子も輝く学級をつくる』

石川晋 佐内信之 阿部隆幸 (2013年 学事出版)

『先生のためのアイデアブック』 協同学習の基本原則とテクニック

ジョージ・ジェイコブズ ロー・ワン・イン マイケル・パワー (2006年 日本協同教育学会)

### 【グループワークトレーニング関係】

『学校グループワークトレーニング』

坂野公信監修 横浜市学校GWT研究会 (1989年 遊戯社)

『協力すれば何かが変わる』 続・学校グループワークトレーニング

坂野公信監修 日本学校GWT研究会 (1994年 遊戯社)

『学校グループワークトレーニング3』 友だちっていいな 自分っていいな

日本学校GWT研究会編著 (2003年 遊戯社)

### 【学び合い関係】

クラスが元気になる 『『学び合い』スタートブック』

西川純編著 (2010年 学陽書房)

『だからこの『学び合い』は成功する!』

水落芳明 阿部隆幸編著 (2015年 学事出版)

